

---

**のたばねえがこんなに可愛い...に決まってるだろ？ (【体験版】 + 【正規版】同梱パック仕様)**

暮灘雪夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺のたばねえがこんなに可愛い…に決まってるだろ？（【体験版】+【正規版】同梱パック仕様）

### 【Nコード】

N6747X

### 【作者名】

暮灘雪夜

### 【あらすじ】

「俺はただ守りたいんだ…束ねえに悲しい涙を流させる全てから…」

だから少年は、その身に最先端科学で作られた甲冑を纏う事を決め…

「だから、俺は…」

剣を握り、

「全ての歪みを正す!!」

安楽の園から、策謀渦巻く青き星へと舞い戻る!!

この物語は…

一人の愛しい女性を守る為に甲冑を纏う覚悟を決めた一人の少年の、  
成長と戦いの記録である！

嘘ですm(\_\_\_\_\_)m

いやゝ、最近妙に幻覚じみたISの【脳内動画(笑)】が回るので、  
勢いだけで書いてしまいました(^^)；

基本的に、

ヒーロー 　　いつくん改訂式

ヒロイン 　東ねえカスタム

でお送りします

東ねえは、【別作品からの転生者】という、かなりトリッキーなキ  
ャラで、いつくんは妙に飄々として淡々として…壊れてます(笑)

【正規版】からは、1st幼馴染みではなく、”ダークネス・2nd

dヒロイン（！？）”も参戦し、更にカオスな方向へ…

そんな作品ですが、お付き合い頂ければ幸いです（；^| ^A

追伸

皆様のご声援が後押しとなり、ついに（【体験版】+【正規版】同梱パック仕様）になりました！

この場を借りて厚く御礼を申し上げますと共に、これからもどうかよろしくお願い致しますm（——）m

【体験版】プロローグ：“その時、確かに宇宙（そら）から白い天使  
皆様、こんにちはー

この度、【俺束】に関心をもって頂きありがとうございますm  
ー)m

作者の暮灘雪夜と申します（――）

プロローグなのに、いきなり束ねえの正体が8割バレます（笑）

かなり短いですが、プロローグという事でご容赦を（^^；

一応、束ねえの可愛さとメイン・ヒロインの所以は詰め込んだつもりですが、果たして…

【体験版】プロローグ：“&quot;その時、確かに宇宙（そら）から白い天使

唐突だけど、俺は誘拐されていた。

カビ臭い空気から察するに、恐らく何処かの廃虚だろう。

理由は、まあ想像はつく。

（千冬姉の連続優勝を、どうしても阻止したい連中がいるって事が…）

ISの登場以来、実質的に文字通りの”世界最強”を決める大会として開催されるようになった”モンド・グロツソ”…

千冬姉は、その第1回大会で優勝している。

連続優勝なんかしたら、商売上がった…って輩も多いんだろう。

（って事は、犯人は何処かの軍産かな…）

千冬姉のISは、”束ねえ（たばねえ）”…千冬姉の親友で、俺の初恋の人でもある篠ノ之束お手製のIS【暮桜】だ。

いくら束ねえが天才とはいえ、個人が作った機体に捻られるようじや、ここ数年軍需産業は「昼寝でもしていたのか？」「税金の無駄遣い」と世論に表され、国民からの圧力で政府からの開発資金の大

幅減額は避けられないだろう。

非合法武装組織にヤバイ橋を渡ってまで売るんじゃない、基本的に兵器関連の売り先は、軍や警察なんかの政府関係武装許可組織しかない。

ISの登場で全ての兵器（少なくとも戦術レベルの兵器）を時代遅れの遺物に変わった今となつては、まともなドル箱になるのは、やはりISしかない。

（そりゃ、何処の軍産も優勝目指して必死にもなるよなあ）

まあ、人質は生きてないと意味は無いから、コンクリ製の靴履かされて東京湾の奥底で、ヘドロや魚と仲良しになる…って可能性は最初から無いと思ってたけど。

（誘拐 監禁 放置プレイって事は、割と良心的な組織だな…）

うん。

どうやら、純粹に千冬姉の連続優勝を阻止したいだけなんだろう。

妙な薬物注射されたり飲まされた形跡はないし、体をいじられた様子もない。

えっ？

なんでそんな暢気なのかつて？

身内がIS界の最高峰なんだから、このぐらいは想定内ですから！

それになまじ考えてどうにもならないなら、いつそ心落ち着かせて

相手に付け入るチャンスを待つ方がよほど建設的だろ？

（とりあえず、相手を見極めないと…）

祈るとすれば、俺を拐った連中の中に、トチ狂ったモーホーがいま  
せんように…ってぐらいだ。

そんなどうでもいいことを考えてると…

『デイバアイイン…』

それはどこか聞き覚えのある声で…

『バスタアアアーッ！！』

桜色の光柱が天井を突き抜け、俺のすぐそばの床さえも撃ち抜き、  
地下への一本道を作る。

本来なら恐怖する威力…あるいは、シーンかもしれないけど…

（ただ、もう二度と見れないと思っていた顔が見れた事が嬉しくて  
…）

また会えた事がただ嬉しくて…

ぽっかりと抜けた天井から見える青空…

俺、おりむら・いちか織斑一夏は、確かに白き衣を身に纏う天使を見たんだ…



\*\*\*\*\*

「大丈夫…？　　いつくん…」

舞い降りた天使は、そう心配そうに俺の顔を覗きこんでくる。

自分が上手く微笑めてるか自信はない。

姉と同じく、俺も無愛想な方だし。

俺にかけられた戒めを解くと、そつと俺を抱きしめて…

「ごめんね…　　いつくん…　　いつくんまで私に巻き込んだじゃって、本当にごめんね…」

その天使は、子供のように泣きじゃくった。

「許してなんて…言えないよね…」

確かに許せない。

俺を拐った事は、気にしてもいない。

だけど、俺を拐った結果、この娘を泣かした連中が…何より俺が許せなかった。

でも、今の俺にできるのは…

「もう泣かないで…ね？」 束ねえ」

「いつくん…？」

俺は、初恋の人の背をいつの間にか追い越してしまった事に素直な喜びを感じながら、

「束ねえ…悲しい涙は流しちゃ駄目だよ？ 俺はこの通りピンピンしてるからさ！」

束ねえを抱き締め返した。

（束ねえ…こんなに小さかったんだ…）

相対的なサイズ関係は変わってしまったけど、

（それでも変わらない物もある…）

シャンプーのいい匂いがする桜色の長くて柔らかい髪も…

少し垂れた優しそうな瞳も…

実は凄く泣き虫なところも…

本当はビビりなのに、いざとなったら勇気を振り絞るところも…

そしてきっと、

(いつも才能に振り回されて、生き方が不器用なところも…)

だから、こう言おう。

「東ねえ…また会えたね…」

「いつくん…!」

東ねえが世界中のお尋ね者になり、俺の前から姿を消してから…

あの時に錆び付いた俺の心の中の時計が、微かに…でもはつきりと再び動き出した事を、俺は確かに感じていた。

\*\*\*\*\*

「そついや、束ねえがここにいるって事は…千冬姉は？」

「なんの番狂わせもないで、あつさり連覇したよ」

さつきまで泣いてたカラスがなんとやら。

まあ、こんな風に表情がコロコロめまぐるしく変わるのも、束ねえの可愛いとこだ

「私がいつくんを助けにいくって言ったら、ちーちゃん『そうか…頼んだ』って言うてくれたんだあ」

束ねえはテヘヘッ　と笑うと、

「私、嬉しかったんだあ…ちーちゃん、こんな私でもまだ信じてくれてるんだって…」

千冬姉が世界で一番信頼してる人間って、多分…いや、間違いなく束ねえだと思うよ？

（千冬姉が微笑みながら『大馬鹿』って言うの束ねえだけだし）

多分、その次が俺…だといいなあ。

「ねえ、いつくん…」

「なに？」

束ねえは真剣な顔を見ると、

「もうね…地上に”本当に安全な場所”って、もう無いかもしれない…」

「だろうね」

「本当にごめんね…私がISなんか作ったから…ちーちゃんも、いつくんも…」

「いや、そんなことないよ。そもそも、試験飛行中の”白騎士”をトレースされた時だって、千冬姉だって致命的なミスしてるわけだし」

「でも、私がコアをばらまいちゃったから…」

あゝもう！

「あの時、もし束ねえが400個以上のコアを世界中に振り分けなければ、たった1つのコアの奪い合いで、あの時点で第三次世界大戦が起きてたって！」

俺に言わせれば、もっとコアを寄越せって束ねえを追い掛け回してる世界の方が問題あるよ。

「いつくん…」

束ねえは少し顔を赤らめて、

「でも、やっぱり私の責任なんだよ…」

あつ、またうつ向いてる。

「だからっ!」

おっ、復活

「その…いっくんが良かったらなんだけど…」

束ねえは急にモジモジすると、

「束さんと、一緒に暮らさないかなあゝって…ほ、ほら! 宇宙<sup>そら</sup>にあるから、地上よりは安全だし!!」

誘拐犯サマ、心から感謝します。

お礼に黒幕見つけても、命<sup>いのち</sup>ごいするような死に方だけは勘弁してやるう。

俺は束ねえを抱き締め直すと、

「是非…!!」

忘れようとしてた

想いが今

動き出す

錆び付いた時計に

油を落として

止まった時を

進めてみよう

【体験版】プロローグ：“&quot;その時、確かに宇宙（そら）から白い天使

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（――）m

どうやら束ねえの中の人は、” 誰もが知る管理局の白き魔王サマ（笑）” とは厳密には違う臭いです。

例えるなら、N a n o h aさんではなく、” なのちゃん” がそのまま大きくなっちゃったような？

束ねえの中味（笑）がかけるぐらい話が書ければいいなあ〜と思ってる暮灘です（^^）；

実は、デイバアイイン・バスタアアアーッ！！の天井貫きは、スバルのエピソードのパロディだったりして（笑）

次回、いっくんがとんでもないことに…？

それでは、またお会いできる事を祈って（――）



【体験版】第1話    &quot; 兎は近い過去の夢を見て、遠い世界に思いを馳

皆様、こんばんわー

”俺束”の作者の暮灘ですm(\_\_\_\_)m

いや、その皆様のあまりの反響の大きさに、作者正直驚いてます（驚！）

それで、その…

勢いに押されて、短いですがあれから1話書けてしまいました（^  
^；

超不定期更新というのは、早まる事もあるって事でご容赦を（\_\_\_\_）

あと、ご感想の返信はアップ後にしますので、よろしく願ひします。

そんな理由で予定は少し変わり、前半は俺束版の”白騎士事件”の  
真実。

千冬姉と”相棒”が大暴れます（笑）

後半は、束ねえの正体の95%以上が分かるエピソードです(;^A  
| ^ A

なんかネタ満載ですが、楽しんで頂くと同時に束ねえの可愛さを感じて貰えれば幸いです(o^ - ^)b

【体験版】第1話    &quot; 兎は近い過去の夢を見て、遠い世界に思いを馳

夢…

夢を見ていた…

それは、遠いようでつい最近のような気がする出来事…

数年前…

太平洋上空某所

「ちーちゃん、大変大変たいへんだよお！    アクティブ・ステルスにエラーが発生してる！    ちーちゃんの姿、レーダーとかに丸見えで、ずっとトレースされてたみたいなんだよぉっ！！」

私が大慌てで魔力通信を繋いだ先にいる親友、ちーちゃんこと織斑千冬ちゃんは、何故かのんびりとしたように聞こえる声で、

『そう慌てるな束。さっきから武装解除と投降を呼び掛けられてるからな…状況は把握してる』

そして、ちーちゃんはクツクツって小さく笑うと、

『それにしても、第7艦隊総出で仕掛けてくるとは：ヤンキーも中々歓迎つてのがわかつてると思わないか？』 “レーヴァテイン” 』

『 “Ja・重力制御に慣性制御：未知の技術を人間サイズにまとめ、単独での宇宙空間飛行に大気圏突入、大気圏内の超音速巡行まで魅せたのです。きっと人工国家の住人にとっては、喉から手が出るほど欲しいでしょう” 』

『 フン：そこまで世界唯一無二の軍事大国でいたい、か？ だからと言って、むざむざ束の技術の結晶をくれてやる義理はない。だろ？ 』

「ほえっ！？ ちーちゃん何を言って…」

『 “当然ですマスター。アーク・マスター（創造主）の技術を、誰も頼んでないのに世界の警察を自称する下品な輩に、わざわざくれてやる必要はありません” 』

「ちよっ！？ レーヴァテインまで何を言ってるのおっっ！？」

『 フン。いい返答だな？ ならば、我が愛剣よ…取るべき手立ては一つだと思わんか？ 』

『 “もちろんです！” 』

（も、もしかしてレーヴァテインのインテリジェンス・ユニット、シグさんの人格を参考にしたの失敗だったのかにや…？）

『『降りかかる火の粉は払うのみっ！！』』

「ちよつとお！？　ちーちゃん！？　レーヴァテイン！？」

あゝん！

どうしてこうなっちゃうのおゝっ！？

「ちよつと待つて！　今、艦隊の指揮統制システムをハッキングするから、その隙に…」

『やめておけ、束。魔力通信ならいざ知らず、物理回線への干渉は必ず逆探される…ヤンキーは、残念だがその手のシステムに長けるのさ』

『“【アクシズ】が稼働状態に無い以上、アーク・マスターの居所を探知されるのは、得策ではありません”』

『“という訳だ。レーヴァテイン！　せつかくの実戦テストだ…とっておきを使っぞ！”』

『“マスター！　その言葉を待っていました！　【レリック・カートリッジ】ロード…！！”』

「それらめえゝゝゝっ！！　まだテストも終わつたないよおゝっ！！」

『何を言ってるんだ、束？　だから今、テストするんだろ？』

『 その通りです、マスター。エネルギー、フルチャージ完了！』

『 フフ…征くぞレーヴァテイン！！』

『 ヤ・ボール！！』

その日、たった1機の…世界で初めて確認されたIS”ヴァイス・リッター白騎士”と  
一振りの炎の魔剣”レーヴァテイン”の前に、世界最強を自負して  
いた米国第7艦隊は、為す術もなく壊滅した…

世に言う【白騎士事件】である。

この事件により、世界の軍事バランスは急速に崩れ初め、誰もが  
未知の兵器IS”に注目するようになる…

篠之ノ束が望む望まずに関わらず…

\*\*\*\*\*

『マスター、そろそろ起床の時間です』

私は、うつらうつらしていた意識が、ゆっくり現実に戻されるのを感じていた。

（なんだか、懐かしい夢みちゃったなあ…）

あれが、全ての始まりだったのかな…？

「おはよう。”レイジング・ハート”」

私は、ビー玉サイズの赤いオーブ（魔導結晶球体）に話かける。

『おはようございます。マスター』

”レイジング・ハート”…

私が生まれた時に握っていた”赤いビー玉”…  
そして、

（私と一緒に、”あの世界”から流された長年のパートナー…）

全てのISの”原典”…

「ねえ、レイジングハート…」

『なんでしょう?』

「もしかして、ちーちゃんにISを渡したの、間違ってたのかな…私が、ISなんか渡さなければ、ちーちゃんもいっくん、ほーきちやんも…みんな、こんな事にならなかったのかな?」

『いえ。フロイライン・チフユの場合、イチカが常々言ってるように、元々の性格です』

にや、にやんか身も蓋もないなあゝ（汗）

『マスターがご自分を責めるのは、筋違いと言わざるえません』

「でも…」

『マスターは常に最善と思われる手段を尽くした事は、常にそばで見っていた私が証明します』

「なら、どうしてこうなっちゃったんだろ?」

『”世界は、こんな筈じゃなかった事ばかりだ”…』

「あはは クロノ君の決め台詞だね?」

なんだか、凄く凄く懐かしい…



（もう、”別の世界の出来事”なのに…）

私の中では繋がった記憶で…

「クロノ君、元気かなあ…キャロちゃんと、相変わらずラブラブなのかな？」

『おそらく。クロノ隊長は筋金入りの”真性”で、キャロ殿はあれ以上大きくならない生き物ですから』

れ、レイジングハート…  
相変わらず容赦ないなあ（汗）

「じゃあ、まだ二人とも虎型の機動兵器と龍型の機動兵器に乗って、合体しながら前線で頑張ってるのかな…」

クロノ君、『魔導炉で動いてるから問題無い！』って言ってたけど、あのロストロギアって絶対に質量兵器だよな？

（だって、”聖王のゆりかご”の上に乗っちゃって、薙刀やヌンチャクでドツキ回してたし…）

”JS事件”かあ…

「スカちゃんとか、今頃どうしてるだろ…」

『マスター…我々は、おそらくあの世界に戻れません』

「そう…だね」

『ならば貴女は、時空管理局魔導兵器開発部デバイス・ウエポン・チーフ・エンジニア”高町なのは”ではなく、IS開発者”篠之ノ束”として生きるべきです』

「うん…ありがとう。レイジングハート…」

『どういたしまして。それに今のマスターには、決して戻れない世界に想いを馳せるより先にやるべき事があるでしょう?』

「えっと…」

『イチカの為に朝食を用意する事。古今東西、意中の男を射止める秘訣は”胃袋を支配する”です。これは元の世界でも、こちらの世界でも不変の真理ですから』

「れれれれれ、レイジングハートおっ!?!」

『昨晚”も”あれだけ淫ら…もとい。乱れ咲きしておいて、今更その反応は無いのでは?』

「レイジングハートのばかあ~~~~っ!?!」

こうして、かつて【高町なのは】と呼ばれ、今は【篠之ノ束】と呼ばれる少女(?)の朝は過ぎて行くのだった。



【体験版】第1話    &quot; 兎は近い過去の夢を見て、遠い世界に思いを馳

皆様、ご愛読と沢山のご感想とご反響を、本当にありがとうございます  
ますm(――)m

今回は、束ねえの一人視点で、”一緒に別の世界から流されたレイ  
ジングハート”との二人(?)語りとなりました。

いっくんファンの方、すみません(^^;

次回こそは必ず！

お気付きの方は多いかもしれませんが、【クロキヤロ(笑)】は、  
超機人大戦における中の人ネタですね(；^―^A

「クスハ！」

「ブリットくんっ！」

ってノリで、活躍してたんでしょう。

【ボルテールⅡ龍王機】って感じで。

フリードはサブパイ扱いで、精神コマンドとか持ってそう(笑)

アイデア（脳内動画）が固まれば、また書こうと思いますので、その時はどうかお願い致しますm（――）m

【体験版】第2話 &quot;ナノマシン使いは希望の星にて鬼の料理を食す

皆様、こんにちわー

いつもぐつたりな暮灘です（＾＾；

勢いに身を任せ、出来てしまった第2話です（＾＾；）

前半は、うゝん…ネタですね（笑）

というか、束ねえの中の人の生まれた世界ではなく、時代を特定できるのと、現在の束ねえの隠れ家が分かります。

後半は、ついに我らがヒーロー（笑）のいっくん再登場

ついでに”相棒”も判明するし、文字通りの”魔改造”、更には束ねえの料理の腕（笑）とかも公表されます。

なんかラストは原作と同じ程度に「リア充、爆発しろ！」的な展開があります…

いっくん、人間の二大（あるいは三大）欲求に素直だなっ（o^  
,  
) b

追伸

そつえば、俺束の原型になった話（本放送の時に妄想）ってのが

あつて…

束ねえが一人じゃ寂しく（共犯者が欲しく）なって一夏を拉致（笑）、まあ束のどこにいるなら身柄は安全（？）だらうって事で千冬は黙認。

んで、第2回大会に”チームTABANE（笑）”の代表として乱入…なんて話を考えましたっけ（^^）；

うる覚えですが、この時にドイツ・チームの世話になったのと、”なんちゃって千冬姉システム”の調査の為にドイツ入りしてえゝみたいな展開（確かせっしーともこの時エンカウントしてたような？）で…

んで、表向き本国命令（本当は束ねえからの指示）でIS学園に入学（潜入）、んで原作よりややハード（主に性的な意味？）展開で、一夏恋しさに追い掛けてきたラウラが両手両足の一夏見てブチ切れる…

なんて話ですが、需要があるなら俺束が一段落ついたら、とりあえず体験版を書いてみましょうか？（^^）；

会話サンプル（笑）

第

「お前と私が同室なのは姉さんの配慮だ。わかるだろ？」

せっしー

「こうして一夏様にIS学園で再会できるなんて、乙女座のわたくしとしては、センチメンタルな運命を感じてしまいますわ」

りんりん

「中華は世界最高峰よ？ 料理の味も女の味もね」

シャル（男装時）

「イチカ… 男の娘って好き？」

ラウラ

「イチカ！ お前の安住の地はドイツにしかないと知れっ！！」

前書きで何を書いてるんだか（笑）



皆さんは、”アクシズ”と聞くと、何を連想するだろうか？

シャア？

ハマーン？

サザビー？

キュベレイ？

ちなみに作者はジオニスト寄りだ（笑）

では、篠之ノ束に聞いたら、何と答えるだろう？

それは多分、誰も予想しない答え…

「 ”希望”…だよ 」

その意味は、篠之ノ束の中の人（？）

かつて”高町なのは”と呼ばれた少女の生い立ちを振り返らなければなるまい。

高町なのはが生まれたのは、

【宇宙歴（U.C） 0201年】

つまり、”ブリティッシュ作戦”の後に無理な地上降下作戦を行わず、持てる戦力をオデッサではなく混乱するルナツーに向けて占領。完全に制宙権を手に入れた後、月面に設置したマス・ドライバー（通称”ギガノス砲”）で大規模質量を射出、地球にガミラスじみた【戦略砲撃】を加え連邦を疲弊させた後、最終曲面でソーラーレイによる”ピンポイント砲撃”でジャブローを焼き払いジオンが勝利した”一年半戦争”の約120年後に生まれた女の子だ。

建国の父であるジオン・ズム・ダイクン、戦後すぐに激務による心臓麻痺で倒れた彼の後釜となったギレン・ザビ（ジオン”共和国”総軍最高司令官のデギンは、戦後すぐに引退していた）、そして一年半戦争の英雄であるキャスバル・レム・ダイクン、ジオン最初の女性首相であるミネバ・ザビと続いたジオンの系譜は、人類の宇宙への拡散を急速に促した。

金星や火星のテラ・フォーミング等はその顕著な例であろう。

それは、後方の軍需基地兼兵器工場であり、万が一にもジオン本国が陥落した場合の拠点として計画された”アクシズ”も例外ではなかった。

戦中は存在を隠蔽されてたアクシズは、戦後、太陽系外縁開発の最重要拠点として大々的に発表され、大型宇宙船の建造や整備を行う大規模宇宙港として発展した。

それは、既に地球人類がバーナード星系を皮切りに他星系に進出し、自らの領土としていた…そんな時代、なのはが生まれた時代もそれは変わらず、太陽系最大級の宇宙港として機能していた。

なのはは…いや、東は中学の修学旅行で行ったアクシズの風景を、未だに忘れられないでいた。

胸を張り、意気揚々と外宇宙へ旅立つ人達や出入りする堂々とした宇宙船を見た感動を…

この頃のなのはは、既に管理局と接触していたが、それでも【魔法に頼らず科学だけでここまで至った】事に素直に感動した。

であるならば、本来なら亜空間に漂っている筈の”それ”…

別の世界なら”時の庭園”と呼ばれていたそれを三次元に引っぱり出し、アステロイド・ベルトに定着させた時、”アクシズ”と名付けても、何の不思議もなかった。

アクシズは、篠之ノ束の…かつて高町なのはと呼ばれた少女の”希望の象徴”なのだから…

等と壮大なスペース・オペラ風に書いてみたが、今の篠之ノ束とも  
う一人の住人にとつては、安心して寝食できる場所というだけで、  
十分な意味があつたが。

「ふんふんふん　よつと」

鼻歌混じりにステーキのように厚切りのベーコンをフライパンの上  
でひっくり返す束。

その手つきは、流石に人気喫茶店の娘（なのはだった頃は、だが）  
という出自だけあり、実に慣れている。

そもそも千冬とのなれ初めも、いつも購買のパンばかりだった千冬  
に見かねた束が、弁当を作つていった事に始まる。

”アクシズの同居人”に言わせれば、

「千冬姉は、束ねえに餌付けされたようなもんだな」

まあ、これを本人に面と向かつて言えば、少々【生まれてきてご免  
なさい】的な目に合うこと請け合いだが（笑）

あつ、勿論こんなヘヴィな朝食は束ではなく、もうすぐ起きてくる  
だろう同居人の為の物だ。

そして、もう年単位一緒に暮らし、すっかり聞き慣れた足音に束は  
振り返り、

「おっはよ　いっくん」

「おはよゝ、束ねえゝ」

と、気の抜けた返事を返したのは、この2年間で見違えるほど逞しく、また精悍になって…とは、この寝惚けた様子からは言えない我がヒーロー（笑）、織斑一夏である。

いや、眠そうというより寧ろ…

「なんか、お腹ペコペコって感じだね？」

「束ねえ、正解。実は”ブレハ”に頼んで、睡眠中も戦闘シミュレートしてた」

テヘヘツ と笑う一夏に、束は「怒ったぞぉー」 という感じで、オタマを持ちながら両手を腰に当て、

「もうっ！ また無茶してえゝっ…」 ブレイブハート”もちゃんと止めないと駄目じゃないっ！」

すると、一夏の右手に”ビルトイン（一体化）” されているガントレットから、

『それがマスターの望みですから。”力が欲しいか？ ならばくれてやる” が、我らデバイスの本質です』

ライライ…どこのARMSだよ？とツツコみたくなる返事を返したのは、

『遅ればせながら、おはようございます。アーク・マスター、”お姉様”』

「おはよ　ブレイブハート」

『おはよう。我が妹よ』

インテリジェンス・デバイス【ブレイブハート】

レイジングハートから直接、”株分け”された一夏専用デバイスだ。

特徴は、いわゆる”パラサイト・タイプ寄生型”と呼ばれる、マスターの肉体と一体化して機能する事だ。

また、パラサイトと待機状態でも他のデバイスより大きなボディ故に、実に膨大な演算能力と、マスターとの高いシンクロ・レート誇る。

その能力や必然は、そのうち語られるだろう…いや、多分（汗）

「おっ！　相変わらずつまそおっ！！」

束特性のスパイスが効いた厚切りベーコンに、焼きたてのベーグル、いかにも新鮮そうな野菜とエビを使ったシュリンプ・サラダに甘い香りの湯気が食欲を掻き立てるコーン・ポタージュ…

どうやら全てお手製で、東の料理スキルは全登場キャラ（笑）の中でも頭一つ抜き出てそうだ。

お菓子作りが趣味だった”なのは時代”の経験も生かされてるみたいだし

別に一夏じゃなくても、これだけで嫁に欲しくなるなあ…

「ほんじゃあ、いったただきまゝす！」

「どうぞ召し上げれ」

「それにしても、相変わらず凄い食べっぷりだねえ」 作ってる  
東さんとしては嬉しくなっちゃうけど」

「寝てる間も”副脳”や全身のナノマシンぶん回してるから、腹減  
って腹減って…ナノマシンって、ほんと燃費悪いよな？」

東はクスクス笑うと、

「ナノマシン入れてる人って、みんなそれ言うよ」

一夏の体内には、実は大量のナノマシンが注入されている。

それも、今頃千冬恋しさにもんもんしてるだろうドイツの黒ウサギ  
（小）とは比べ物にならない程の量を、だ。

もし比べるとするなら、黒ウサギ（小）より劇場版ナデシコの天河アキトの方が適切だろう。

実は、ブレイブハートの重要な機能の一つに”体内ナノマシンの積<sup>ア</sup>タイプ・コントロール<sup>ク</sup>極的制御”が含まれていた。

もともと、ナノマシンといっても地上で作られてる”中途半端な紛い物”ではなく、束が丹精を込めて精製し、レイジングハートとブレイブハートが細心の注意を払い段階的投与をした、全く次元の違う代物ではあるようだが…

「ごちそうさま」

「お粗末さまでした」

あるだけの食事をペロリと食べて満足げな一夏。

束はそれを見て、嬉しそうに微笑む。

そして、やがてキッチンから流れてくるリズムカルに皿を洗う音と、可愛らしい鼻歌…

「……………」

一夏はフラリと何かに引き寄せられるように立ち上がると、束の背



後に素早く回り、

”ギュッ”

「い、いつくん!？」

「まだ少し食べたりない…」

「えっと…じゃあ、デザートを」

「めいんでいつしゅ、まだたべてない」

”どさっ！ びりびり！”

「あのく、いつくん…」

「なに？」

「なんで私、床に押し倒されて、お洋服びりびりに破かれてるのかなあ…って…」

「ん…？ メインディッシュの”兔料理”を食べようとしてるだけだけど？」

「みゃあ…っ！ 私、食べ物じゃないよあ…っ!？」

しかし、一夏はニツコリ笑い、

「束ねえは、俺にとって一番のご馳走だから…じゃあ、いただきます」

「食べちゃめえええ〜っ！！ ひぎいっ！」

『So Sweet』

と最後に、レイハ&amp;ブレハ姉妹の声が重なった。

織斑一夏…

この2年間で、随分と”自分に正直”になりましたとさ

【体験版】第2話    &quot;ナノマシン使いは希望の星にて鬼の料理を食す

皆様、ご愛読ありがとうございますm(\_\_\_\_)m

本当に脳内動画を再生しただけのパイロット版なのに、こんなに反響を頂けるとは感謝感謝です(\_\_\_\_)

これで、束ねえの秘密は98%くらい公開でしょうか？(笑)

それにしても、いっくんマジケダモノ(^^)；

読者様の反応が怖いですが、これも仕様って事で納得して頂ければなあ〜と。

デバイスとナノマシン強化でチート化(笑)したいっくんは、果たしてどこに逝くのか？

また文書がまとまれば投稿します

それでは、またお会いできる事を祈りつつ(\_\_\_\_)

【体験版】第3話    &quot;こわれたいっくんとこわされたたばちゃん&

皆様、こんばんわー

深夜アップになってしまい、焦り気味の暮灘です（^^；

というか、やはり1日に2本アップはキツイなあゝ（汗）

ま、まあでも今回の内容は、ある意味地方局の深夜アニメ枠っぽい内容だからありかなっと（^^；

とりあえず、今回で【束ねえの秘密（笑）】は、ほぼコンプリートです（o^\_^）b

そして、中身は…サブタイ通りです（汗）

ちなみに元ネタは、【電波青春】の作者サマのデビュー作だったりして（^^；

念のために【微工 注意（笑）】と表記しつつ、お楽しみ頂ければ幸いッス（o^\_^）b

追伸

真面目な一夏ファンの皆様、怒らないでくださると嬉しいッス(^  
| ^ ; )

【体験版】第3話 &quot;こわれたいっくんとこわされたたばちゃん&

火星と木星の間

アステロイド・ベルト…

偽装小惑星” アクシズ”

「ひぎいっ！　ぎひっ！　ひぎゅううっ！！」

リズミカルに一夏の上で跳ねていた東のグラマラスな肢体からだが一際大きくのけぞり、全身を痙攣させたあとゆっくりと弛緩させた…

「またイツちゃったんだ？　東ねえ、かゝわいい」

一夏の顔はにこやかだ。  
だけど、その瞳には…  
紛れもない”キョウキ”が宿っていた…

「東ねえ…”あの部屋”に行こっか？」

一夏は東の女性らしい肢体を抱き締め、

「らめ…らよおお…わらひ…いったばりやりれ…びんかん…」

「ダメ」

”連結したまま”立ち上がった。

「ぎゃひいいい！」

只でさえ絶頂の余波と余韻で敏感になった肢体に、一夏の立ち上がった衝撃と自分の体重で、杭のように深々と突き刺さる”分身”…  
その強すぎる刺激に、獣じみた悲鳴を上げる束がいた。

「ひゃぐっ！　ぐひゃー！」

歩く度にその振動と上下動が”結合部”に伝わり、束の”胎内”に  
潜りこんだ一夏の一部が、より深く内部を穿とうとする。

「おきゅり…あらっれ…」

息も絶え絶えな束…

肢体の一番深い部分を抉られ擦られる感覚…

強すぎる快感に、既に呂律は回っていない。

そして、その刺激は確実に束の脳を侵食していた…

束をいわゆる【駅弁】にしたまま一夏がやってきたのは、彼が”ア  
クシズ”でも最もお気に入りの部屋だった。

束の中の人物：高町なのはが”いた”世界では、”時の庭園”と呼  
ばれ、三次元に引っ張りだされる事なく亜空間に位置してた”アク  
シズ”…

その”時の庭園”には、いくつもの部屋があつたが、その1つは”  
アリシア”という名の少々と深い関わりをもつ部屋があつた。

そう、”仮死状態”だったアリシアが収められていた大型医療用カ  
プセルがあつた部屋だ。

ちなみに、束になったなのは（ややこしい…）がいた世界では、ア  
リシアは少なくとも、なのはがロストログアに飲み込まれて【コチ  
ラに流される】まではピンピンしてたし、きっと今でもピンピンし  
てるだろう。

というか、プレセアさんも”アリシアが欲しかったから妹”を覚え  
てた上でフェイトを作ったみたいだし（笑）

むしろ最近のアリシアは、中学卒業して早々と永久就職：【フェイ  
ト・T・スクライア】になつてしまった妹（しかも、同じ年に赤毛  
の養子までとつた。スカさん事件の後は、金髪的美少女まで養子に  
して4人家族）や自分が復活した途端に気が抜けたのか本来の”天



然キャラ”に戻り、あっさり再婚してしまった母を横目で見ながら、

『もしかして、私って逝き遅れっ!?!』

と、無限書庫で悶々とした毎日を送ってるという。

大丈夫だ司書長アリシア。

例えば長い時間カプセルで寝てた副作用で、成長が殆ど止まってたとしても、きつと需要はあるさ!

” キャロ・ハラオウン（笑） ” みたいなケースは、わりと転がってる…筈。

話は大幅に横道に逸れたが、これも仕様という事でご容赦を。

さて、別の世界ではアリシアが入っていた【透明な医療用生命維持カプセル】…

実は、アクシズにもそれは存在していた。

ただし、中に入っているのは…

「ほら、見てごらん。束ねえがもう一人いるよ?」

口調は優しいが、束の桜色の髪を乱暴に掴み、強引に顔をカプセルに向けさせる一夏。

しかし、束が嫌がっていないのは肢体の反応を見れば一目瞭然だ。

内部はギュツと一層強く締めまり、更に粘液を奥から次々に溢れさせていたのだから…

「わらひが…いる…」

そう、カプセルに注入されてるLCLを彷彿させる液体の中に浮かんでいたのは、

「いつ見ても綺麗だよね？」 生身の束ねえ”も、さ」

一夏は、この光景を見た時の衝撃を、未だに忘れていない。

そして、篠之ノ束から聞かされた”ISの真実”を…

「私はね、いつくん…篠之ノ束として生まれる前の記憶があるんだよ…」

語られたのは、束がかつて【高町なのは】という技術職で自ら装備のテスト・パイロットも務める…地球で言うならナチス時代のドイツに実在した【クルト・タンク博士】のような立ち位置の”航空魔導師”だったこと…

「ISに使われてる”コア”はね、本来は【レリック】って呼ばれる”人造魔法エネルギー結晶体”を元にしてるんだ。それにデバースっていう汎用戦闘ユニットの人工知能を組み込んだ物なんだよ…」

【魔法】というファンタジックな力がある世界から転生したという束…

しかし、一夏はそれを妄言と決めつける真似はしなかった。

何故なら、束の口から淡々と語られる内容も、あまりに理路整然とし過ぎていた。

例えば、【魔法】というファンタジーな単語を、もし【まだ人類が知らない未知の物理法則】という単語に置換すれば、逆に説得力が酷くあった。

そもそも、束が前世という高町なのはという女性が生まれたのは、地球以外の惑星にも人が住むようになり、別星系にまで進出していた時代だという…

相対的に言うなら、篠之ノ束は【未来人で異世界人】という特異な存在となる。

だが、”IS”という従来の常識をあらゆる意味で覆す機体…人間が装着できるサイズの機動甲冑に、重力制御や慣性制御、量子

レベルの質量や体積操作まで行つた物を生み出すには、

（寧ろそれぐらいの特異さがないと、有り得ないかもな…）

少なくとも話を聞いてるうち、一夏はそう思うようになっていた。

「IS自体もね、私が高町なのはだった時代に開発していた【ストライカー・フレーム】って装備を、再設計したものなんだ…」

そして、束は自嘲的に笑うと、

「JS式魔導錬金法で、この地球でも【レリック】が出来た時、本当に嬉しかったんだよ？ でも、レリックだけじゃ特に意味はないの…問題は、レリックが溜めた膨大な魔力を、どう物理変換するかだから…だから、私はレリックを中央統制演算システムとマン・マシーン・インターフェース、それに魔導動力炉として使える”コア”に仕立てて、コアで動くISを作ったんだよ…だから、ISの本当の意味は【インフィニット・ストラトス】なんかじゃないの…」

束は一夏を見ると、

「【インテリジェンス・ストライカーデバイス】…それが、本当の”IS”の意味なんだよ」

その後、自分の開発したISが引き起こした様々な出来事に耐えきれず、泣きじゃくる束の口からは、多くの後悔が綴られるが…

それは、また別の機会に譲ろう。

そして、泣き止んだ束は再び自嘲的に笑い、

「でも、やっぱり神様っているのかも…私に”天罰”が下ったんだよ」

「…天罰？」

一夏の言葉に束は頷き、

「魔法の源はリンカーコアだって話したでしょ？ 私のリンカーコアは、殆ど高町なのはの頃と出力は変わらなかったけど…」

束は自分の体を見て、

「篠之ノ束の体はね、その出力…魔力幅射に耐えられ無かったんだよ」

そして、案内されたのがこの部屋…カプセルに浮かぶ”生身の体”だったのだ。

「今の私はね、脳味噌とリンカーコア以外は全部、戦闘機人の体…  
いっくんが最後に見た私と同じに見えても、機械仕掛けなんだよ…」

そして、束は一夏から視線をそらして…

「気持ち悪い…よね？」

”どさっ！”

「いつ…くん？」

その時の一夏の気持ちをどう表現すればいいのだろうか？

答えは簡単だ。

”束ねえは束ねえ。俺の大好きな束ねえは、何も変わってないよ”

だけど、言葉にした途端、全てが嘘臭くなるような気がした。

（言葉じゃ何も伝わらない…！！）

壊れるほど愛しても、1／3も伝わらないかもしれない…

（なら、束ねえを…壊す！）

そして、

（俺も壊れればいいっ！）

そうすれば、2／3は伝わるかもしれない。

愛は、狂気に限りなく近い感情であり、憎しみと同じくその本質は同じ…

だから、愛は人を破綻させる…

理屈じゃない…本能が、魂が叫ぶ生々しい情熱…  
エモーション

その日…

二人の”関係”が始まった日…

一夏は狂気に目覚め、壊し壊れる事を決めた。

東ネエハ、ダレニモワタサナイ…

セカイナンカニワタサナイ…

オレダケノモノダ…

オレダケノモノダ…

オレダケノモノダ…

オレダケノモノダ…

オレダケノ  
...



【体験版】第3話    &quot;こわれたいっくんとこわされたたばちゃん&

皆様、ご愛読ありがとうございますm(\_\_\_\_)m

今から反応が怖い暮灘です(^^;;

最近、女の子同士の純愛しか書いてないから、ついやってしまいました！

…っていうのは、半分は冗談です(笑)

実は、”俺束”を書く上で避けて通れないのが今回のエピソードなんですよ〜。

前半はエロ、中盤はアリシアネタでペースを変えて、ラストに”俺束”の核心と束ねえの最後の秘密、そして一夏に芽生えた闇と病みに続く…みたいな構造なエピソードです(；^ー^A

でも、このエピソードを書かないと、”ダークネス一夏(笑)”の行動原理が意味不明になってしまう畚です。

とりあえず、こんな作風の物語ですが、一夏のIS学園入学がラストとなる【体験版】としては、これで中盤。

残すはあと最短で4〜5話って感じなんですけど、お付き合い頂ければ幸いですm(\_\_\_\_)m



【体験版】第4話    &quot; 兎は自ら創りし鎧に涙を流し、少年は黒き英雄

皆様、こんばんわー

実は行き帰りの電車の中でコソコソ書いてたけど、帰宅してから一気に書き上げた暮灘です（^^）

いや、勢いって大事ですよ（笑）

今回は、前話の”こわれた”の中で意図的にオミットした部分です（；^ー^A

その理由というのも、そのたった1シーンがえっらい長く（だから、今回は俺束の中で今のところ1番長いエピソードになってます）、また俺束が【体験版】で終わるにしても、【正規版（？）】に発展リーチするにしても、最も重要なシーンで、また全体の根幹に関わるエピソードでもあります。

良くも悪くも、【俺束】における束と一夏の剥き出しの本質が描かれるエピソードですが、お楽しみ頂ければ幸いです（o^-'-）b

「ISに使われてる”コア”はね、本来は【レリック】って呼ばれる”人造魔法エネルギー結晶体”を元にしてるんだ。それにデバイスっていう汎用戦闘ユニットの人工知能を組み込んだ物なんだよ…」

束の口から淡々と語られるそれは、世界を根底から覆した”IS”の真実…

「IS自体もね、私が高町なのはだった頃に開発していた【ストライカー・フレーム】って装備を、再設計したものなんだ…」

それは同時に、篠之ノ束という女性が、”この世界ではない世界を知る”という証明でもあり、

「JS式魔導錬金法で、この地球でも【レリック】が出来た時、本当に嬉しかったんだよ？ でも、レリックだけじゃ特に意味はないの…問題は、レリックが溜めた膨大な魔力を、どう物理変換するかだから…」

なのはだった頃の知識…  
もう戻れない世界に想いを馳せるように、束は”レリック”を作った…

「だから、私はレリックを中央統制演算システムとマン・マシーン・

インターフェイス、それに魔導動力炉として使える”コア”に仕立てて、そのコアで自在に動く汎用性の高い…何にでも使える人型ユニット、”IS”を作ったんだよ…」

それは、まるでなのはだった頃にやり残した事を…  
心残りを埋めるように…

「だから、ISの本当の意味は【インフィニット・ストラトス】なんかじゃないの…」

束は一夏を真っ直ぐに見て、

「【インテリジェンス・ストライカーデバイス】…それが、本当の”IS”の意味なんだよ」

「束ねえ…ちよつと待ってくれ」

一夏は、急に入ってきた膨大な情報を一つ一つ噛み砕くようにしてから、

「まず確認したいんだけどさ…今の話を聞く限り、女しか扱えないっていうのは…」

束は小さく頷き、

「私、女の子しか扱えないなんて…一度も、一言だって言っていないんだよ？」

「えっ…?」

「ISを動かす鍵って、性別は全然関係ないの。関係してるのは、【リンカーコア】の出力なんだよ」

またしても聞き覚えのない単語に首を捻る一夏。  
束は優しく諭すように、

「人間なら誰だって持つてる、通常的外科的方法じゃ見る事ができない非物理器官。そして、全ての”物理的以外の力”…【魔力】を生み出す源の事だよ?」

「物理的以外の力が…」

「そう。普通は一人の人間が発する魔力はとても小さくて、力として顕在化することなく無意識のうちに体外に放出されて”魔力拡散力場”を形成するの。だから地球は、魔力的に見るなら濃密な魔力拡散力場が充満してるんだよ」

「一人の力は小さくても、70億人分なら…ってこと?」

一夏の言葉に束は良くできましたという顔で、

「そうだよ。それも地球では魔導師が殆どいなかったから…人類が有史以来、何千年もかけて蓄えてきた分がね」

そして一度言葉を切ると、

「でも魔力だけじゃ、物理的な干渉や影響はない…膨大な魔力を三次元空間で有効利用する為には…」

「物理的な力への変換機がいる。なるほど…それが、”コア”や”IS”に繋がってくるのか」

束はニツコリと微笑み、

「いつくんは優秀だね　きっと、今からでも勉強すれば、凄いエンジニアに慣れるんじゃないかな？」

少し頬を緩ませる一夏。

例えお世辞でも、束にそう言われるだけで、なんだか認められるように嬉しかった…

「魔力を【術式】…魔力を制御する為のプログラムだと思ってね？制御して【物理世界に干渉できる法則性を与えた力…術式制御された魔力…それが即ち、」

「『【魔法】』」

二人の声が綺麗に揃う。

束はクスクス笑い、

「いつくんは、時空管理局でも十分にやってけそうだね？」

「そ、そうかな？」

少し照れる一夏を、束は眩しそうに見て、

「【魔法】で動く、だからこそ物理的常識…エネルギー保存やエントロピー増大、その他の法則を無視して動いてるように見えるISだけど、1つ大きな欠点があるの。それは…」

束は言葉を選びながら、

「乗り手を選びすぎるんだよ。リンカーコアの出力は、ここに関係してくるんだけど…」コア”に組み込まれてれ魔導演算ユニットは、魔導師用の装備”デバイス”から発展したものなんだよ。だから、それを稼働させるには、相応のリンカーコアの出力がいるの」

「でも、地球には魔導師はいない…」

一夏の言葉は、束への疑問というより、言葉として口から出す事で考えを纏めてるようだった。

「魔導師になるのに最低限必要なのは、大きな分ければ二つだけ。先天的なリンカーコアの出力と、後天的な魔導師としての教育：ISは、その魔導師教育を肩代わりする装備って言えるかもしれないね？」

『形を変えた人造魔導師…って言いたくは無いけど』と、束は小さく呟いた。

「それじゃあ、女しか使えないって言うのは…？」



「【誤認】だよ…確かに、私が…ううん。高町なのはがいた世界でも、魔導師は女性が多かった…女の子の方が強い魔力を持つてる確率は高かったけど、それは男の人の魔導師がいなくて意味じゃ、断じてないんだよ」

「もしかして…男にもISを動かせる可能性が、ある…？」

一夏は、自分の声が少し震えてる事を自覚していた。

その感覚は、暗闇で膝まで泥に漬かり、もがいてる時…

ふと頭上を見上げれば微かに一筋の光明が見えた…

例えるなら、それに近いのかもしれない…

「もっちらんだよ！ 比率は確かに女性より低いけど、男性だつて強力な魔導師はいっぱいいたしね…昔はクロノ君に訓練でふるばつこにされてたし、ユーノ君のガード・スキルは最後の最後まで破れなかったし…っていうか、ユーノ君の”空間傾斜防御結界（アングルド・ディメンジョン・ガーフィールド）”とか絶対に反則だと思うんだ？ それ展開したまま突撃して、背後から飛び出たフェイトちゃんとエリオ君がバツサリ！ なんて、ジェット・ストリーム・アタックみたいな攻撃仕掛けてくるし…」

ユーノが古代の魔法文献から復活させた『それ、なんてATフィールド？』ってロスト・マギカ（遺失魔法）とスクライア家のエゲツない合体技を思い出しながら、懐かしい顔をする束…

一夏は、胸にチクリと刺すような痛み…嫉妬という名の小さなトゲの感覚を感じながら、

「それって、俺にもISが使える可能性があるってこと？」

無理矢理自分に意識を向けさせた。

「いっくんなら余裕じゃないかな？ 正確に測定した訳じゃないかはっきりとは言えないけど…多分、ちーちゃんと比べても1.3倍くらいはリンカーコアの出力ありそうだしね」

「なっ！？ なん…だって…！？」

そのハンマーで頭を思い切り殴られたような衝撃に、一夏は思わず絶句した。

「俺が…千冬姉より強くなる可能性、本当にあるの…？」

（あの第7艦隊をたった一人でスクラップの山に変えて、涼しい顔で大会連覇した千冬姉より…？）

それは、幻想に似た夢物語に聞こえたけど…束は事も無げに、

「魔力係数が強さのパラメータって訳じゃないけど、あるないで言うなら確実にあるよ？」

”ざわっ！”

一夏の心がざわめく…はっきりと。

漢として生まれたなら、一度は憧れる【世界最強】の四文字…

ISの登場以来、永遠に男の手に入らないと思われていたそれが、

（俺の手の届くところに…？）

「いつくんみたいな子もいるのに、それでも世界は気付かない…固定された概念を変えたがらないんだよ…」

「束ねえ…？」

「夏が」失われた筈の漢の夢”の復活を感じてる時、束は寂しそうに哀しそうに笑っていた…

「白騎士事件の後、ISが世界最強の力の象徴になっちゃった…その力が欲しくなった国々は、所有権を巡り戦争までしようとしたんだよ…」

ポツリポツリと語る束…

「私はそれが嫌で、当時持ってた材料を全部使って、地球の今の技術でも扱えるように加工した400個以上のコアを作ったんだ…世界中が戦争で奪い合わなくて済む、十分な量の筈だった…」

「束ねえ…」

「戦争は回避できたよ？ それは今でも良かったって思う。でも、今度は400個のコアが…私の作ったコアのせいで、世界が歪んじやった…」

束はうつむいて笑っていた…  
でも、笑顔には見えなかった…

「女尊男卑って、何の根拠も正当性も無い薄っぺらな下らない価値観…その歪んだ世界で、ちーちゃんやほーきちゃん、いつくんが」  
普通に生きる権利”まで奪っちゃったんだよ…」

顔を上げた束は、口元を歪ませ、少したれた優しげな瞳に今にも零れそうに涙を溜めていた…

「どうしてこうなっちゃうのかな？ 私、どこで間違えたんだろ？  
ISを作ったのが間違いだったのかな？ それとも、コアを世界にばら蒔いちゃったから？ 私がただ大人しくしてれば、こんな事にはならなかったのかな…どうして…どうして…」

束は顔を覆い、静かに泣き出した…

嗚咽を漏らしながら小さく…

”ぎゅっ”

「いつ…くん？」

気が付いた時、一夏は本能から束を抱き締め、自分の胸板に顔を押し付けさせながら、髪を優しく撫でた…

「思い切り泣いていいんだ、束ねえ…だって今まで、泣けなかったんだろ？」

「いっくん…いっくん！ いっくん！ いっくん！ うわあああああー…んっ！…！」

束は今度こそ大声で、まるで子供のように泣きじゃくるのだった…

だが、一夏の表情は束の表情と正反対だ。

（どうしてなんだよっ…！）

その表情は、見間違えようの無い憤怒っ…！

（どうして、俺は今まで何もしてこなかった…！）

それは、同時に自分への怒りや苛立ちでもあった…

（どうして、束ねえがここまで追い詰められなけりゃならないんだっ…！…！）

それはある意味、とても真っ直ぐな…不条理への怒り。

まだ世間是不条理なのが当然で、その不条理を当然のように受け止めて生きる事を知らない、少年らしい純粋な想いだっただけ…

（束ねえが、一体何をしたっ！？　ただ束ねえは束ねえらしく生きてただけじゃないかっ！！　どうして世界は、束ねえから何もかもを奪おうとするんだっ！！！！）

大好きな初恋の娘…<sup>ひと</sup>

いつも才能に振り回されて、生きるのに不器用で、そのくせ優しくて、だから傷つき易くて…

（いいだろう…）

一夏はこの時、燃え盛る漆黒の炎のような力がみなぎるのを感じていた…

（間違ってるのは束ねえじゃない…セカイだっ！！）

たった一人の少女を寄ってたかって追い掛け、追い詰め…地球に安住できなくした世界の方だ！！

それが一夏にとっての”真理”…

「もし、俺にISが操れるのなら…」

（ISが歪めた世界だと言っのなら…）

束ねえが望まぬ歪みを、ISが生んだというのなら…

（その歪み、俺が全て正すっ！！）

その純粹過ぎる想いは…

その純粹過ぎる怒りは…

混じり合い火花をあげ、黒き炎となりて少年を鎧のように覆い尽くす…

人は言う…

この瞬間こそが、最強にして最悪のIS乗りとうたわれた…

【織斑一夏】の誕生だっ！！





【体験版】第4話    &quot; 兎は自ら創りし鎧に涙を流し、少年は黒き英雄

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

書いてるうちにどんどん長くなり、「また投稿が深夜枠かつ!？」と焦りまくった暮灘です(^^; ;

前回第3話では”愛ゆえに壊れた二人”を書きましたが、今回は二人別々の意味で…

そう、この物語の”根本的立ち位置”を記したのが、今回のエピソードとなります(;^\_^A

いや、なんか一夏くんが黒くて純粹で熱くて、束ねえが憐れで可愛くて、書いててヘロヘロになりました(笑)

今回のように用事が入るor勢いが乗らなければ更新速度はマチマチになってしまいかもしれませんが、また次回もよろしく願いますm(\_\_\_\_)m

【体験版】第5話 &quot;魔獣は心優しき罫を張り、かくて兎は用意さ

皆様、こんばんわー

またしてもこんな時間にアップの暮灘です（^^；

明日は土曜日って事でご勘弁を

今回のエピソードは、基本的に第3話の続きで、まあ”深夜枠”のエピソードです（笑）

ただ、かなり考えようによっては、重いです（^^；

ある意味、一夏の束に対する【愛情の本質】や、こっそり【レイジングハートの思い】なんかもインストールされてます（^ー^；）

そして…

今までと違う意味で…

束ねえが可愛いッス！（爆）

とりあえずこんな話ですが、お楽しみいただけたら幸いです（o^  
, '（ b

そして再び現在のアクシズ…

情事は続くよ、何処までも…

「ひゃっぐつ！ ぎっ！！」

メデイカル・カプセルに眠る束の”生身の肢体”を肴にしながら、  
脳味噌を移植した機械の肢体の束…”現在の束”を貪る一夏。

それは紛れもなく織斑一夏という【かつて少年だった存在】にとつ  
て、この上なく至福の一時だった。

既に何回もの絶頂の末に束の肢体はすっかり熱を帯び、そして知覚  
を超える快樂は束の正気を融かし…  
狂気ではなく、狂乱の彼岸へと導いていた…

「らめえ…ひよんな…ろこ…いりつりやら…」

「何がダメなのかな？ ああ、この”突起”のこと？ ふふふ…こ  
んなにピンピンにしてるんだ？ 束ねえ、思い切り捻って欲しいん  
だよね？」

「ひがぁ…」

「いいよ。ねじ切れるぐらい捻ってあげるからさ」

一夏は、座った体制で束の”後ろ”に結合しながら、脚の間…その付け根にある、今にも弾けそうなほど充血した突起へと手を伸ばし、人差し指と親指で挟みこんだ。

「らめええええーっ！！」

与え続けられた悦楽で弛緩しきった肢体の最後の力を振り絞るような絶叫も虚しく…

「駄目だよ」

”ギリッ！”

体温を感じぬ台詞と同時に、一夏の指が挟み擦り潰すように、同時に根本からもぎり切るように動いた。

「ふざいいいいーっ！！」

今までより一層大きな絶叫と同時に束の豊満な肢体が跳ねるように痙攣し、見開かれた瞳から、開いた鼻孔から、酸欠の金魚のようにパクパクさせた口から液体が溢れ、そして…

”ぷしゃああああ！”

擬似的なアンモニア臭が水音と同時に部屋に広がった…

「ひつく…ひつく…」

微かな失神の後、気が付いた束は小さく泣き出した。

後ろを貫かれたまま、本物の子供のように…

「たばね…おもらししちゃったよお…いっくんより…おねえちゃん  
なのに…おもらししちゃったよお…」

一人称が変わっていた。

それは、【本来なら存在しない筈の束】だった…

束は幼い頃から【高町なのはとしての意識】が顕在化していた。

そのような束にまともな子供時代なんかある訳はない。

だが…

「大丈夫だよ、”たばね”。そんな事ぐらいで”ボク”はたばねを  
キライになったりしないよ？　むしろ、”おもらししちゃったたば  
ね”は可愛いつて思う」

「いっくん、ほんと？」

「ああ。ほんと」

その時の一夏の微笑みをなんと表現したら良いのだろうか？

あえて言うなら、慈愛に満ちた兄と、魔神の黒さだろうか？

何より…

純粹過ぎてむしろ美しくしら見える”狂気”を瞳に宿していた。

\*\*\*\*\*

種を明かしてしまおう。

束の抱えた数多くの後悔と罪の意識を、一夏はずっと軽くする…出来れば、0にする方法を考えていた。

『束ねえは悪くない。悪いのは世界の方だ！！』

例え一万回その言葉を繰り返したところで、束が納得する訳ないのは目に見えていた。

こういう時、言葉は無力だ。

本人がその言葉を受け入れる気がない…束が自分を赦す気がないのなら、言葉は心の上っ面を滑ってゆくだけ…

ならば、どうするか？

（強制排出させるしかないじゃないか…無理矢理にでも、力任せでもっ…！）

そう考えた時、ヒントをくれたのは意外にも、レイジングハートだった。

『イチカ、少しマスターとの昔話…年寄りの戯言に付き合ってくださいますか？』

今にして思えば、レイジングハートは既に一夏の葛藤と思いを薄々気付いていたのかもしれない。

気付いた上で手を貸したような気がする…

レイジングハートが一夏に話したのは、本当にとりとめのない昔話だった。

ただ、高町なのという人間がどう生きて、篠之ノ束という”この世界の少女”がどう育ったのか…

ただ、それだけだった。  
だが…！



「ありがとう！」

一夏は、その頭の回転の早さを見せつけるように目を爛々と輝かせて駆け出していた。

『Good Luck、イチカ』

というレイジングハートの囁くような声援を背に受けて…

一夏が向かったのは、”束の生身”が眠る部屋だ。

内心、勝手にメディカル・データを覗き見る事を束に謝罪しながら一夏が見つけたのは…

（やっぱり…！！）

ディスプレイに映る全てのデータは、束が紛れもなく”処女”である事を示していた。

「束ねえは、男を知らないんだ！ 多分、”なのはだった頃”を含めても！！」

その時、一夏は狂ったように高笑いをあげていた。

束が【誰のものでもない】事を素直に喜んでいたのじゃない。

ようやく、探してた”突破口”が見つかった事が嬉しかったのだ！

「束ねえ、待っててよ…クククツ…俺が、俺が必ず束ねえを”解放”するからさっ！！」

一夏の出した結論…

それは、

「束ねえを快楽で破壊する…！！」

性的な意味では子供のように束に、強制的に快楽を刻みつけ、また羞恥につぐ羞恥で心を擦り減らさせる…

それは、単純に【束を調教して従順な雌奴隷に仕立てる】なんて単純な話じゃない。

一夏の目的は、全く別にあつた。

「そして、羞恥と快楽の果てに、【人為的なトラウマ】を作る…」

一夏はパンツ！と手を打ち鳴らし、

「”逃げ場”になるトラウマをつ…！！」

少しだけ補足しよう。

人は誰しも何時までも苦しみや重さを抱えては生きていけない。

だからこそ、人間には”忘却”という便利な機能が備わっているのだ。

だが、束にとってこの地球での出来事は…世界の歪みは重くのしかかり、忘れる事は出来そうもなかった。

（だけど、束ねえだって無意識では解放されたがっている…）

人の心の防御機構とはそういう物だ。

（ならば、俺は…）

「それを徹底的に利用させてもらっ…！！」

一夏は、こう考えたのだ。

（束ねえが、罪を感じなくて済む時…それは、）

「世界になんら影響力を持たない…」どこにでもいる普通の子供だったら”って【仮定】…」

そして、子供とは…

「大人では社会的に許されない事も許される存在…」

かくて【逃げ場としてのトラウマ】のモデルは決定した…

（束ねえに幼児退行を引き起こさせ…）

「あり得なかった”無垢なガキ”に還元する！！」

その時一夏の浮かべた笑顔は、先の笑顔と同種同質の物だった…

\*\*\*\*\*

そして、一夏は成功した。

勿論、彼だけの力じゃない。

レイジングハートのここぞという時の的確な支援とバックアップがあったからこそ、成し得た結果だ。

かくも当然の事だろう。

束になる前からマスター…幾多の死地を共に潜り抜けてきた”相棒”に救済の機会があるのなら、彼女がそれを望まぬ訳はないのだから…

『どんな歴戦の戦士とて、休息は必要です』

そして、レイジングハートの見つめる先では…

「ほら、たばね…まだ残ってるだろう？」

後ろに突き刺さったまま、足を捕まれ開かされた束は、まだ一人では用の足せない幼児のようなポーズで、

「うん　　しゃあああ〜っ」

その濁り光の消えた瞳には、既に知性は残っておらず、同時に絶望も哀しみもない…

あるのは快楽を素直に悦びとして受け入れる肢体と、『いちかおにーちゃんだいすき』という魂こゝろだけ…

「たばねね、お尻とお〜てもきもちいいだよお」

「じゃあ、今度はお尻からも出してみようか？」

「うん！」

それはまた、一つの【純粹な愛の姿】には、相違無かった…

【体験版】第5話    &quot;魔獣は心優しき罫を張り、かくて兎は用意さ

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

『一夏が何故、束を壊したのか?』

ある種、その本当の理由が明かされるエピソードでしたが…いかがだったでしょうか?(^^; ;

実は夕方のトラブルや、何がなんでも日付が変わる前にアップしたかった意地で一気に書いたので、誤字脱字はご容赦を(^| ^;) )

その都度に直していくつもりです(\_\_\_\_)

実は、えっちな描写が無ければ、【一夏の狂気と愛】が全面にでたエピソードでしたが、どうだったでしょう?

【体験版】として考えるなら、そろそろ後半戦…

これからも応援よろしくお願いします(o^\_^)(b

それではまたお会いしましょう





【体験版】第6話 &quot;獣は魔物の力得て魔獣へと至り、そして兎の儼

皆様、こんばんわー

本日は中々執筆時間がとれず、シングル・アップになりそうな暮灘です。

今回のエピソードは…

前回サブタイに出てきた”魔獣”の意味が明らかになる回です（笑）

ケダモノいっくん（笑）が、どんな”魔物”の力を得るのか…まあ、それは本編のお楽しみって事で（^^）；

そして、作者が言うのもなんですが…

どんなに強く黒くなくても、いっくんはいっくんだなあと（^^ー  
^；）

b こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^\_^）



そして、暫しの時が流れ…

『イチカ、マスターは？』

ふわふわと漂うように飛んできたビー玉サイズの真つ赤な魔導球<sup>オーブ</sup>に、

「完全に白眼剥いて”落ち”ちゃったからなあ…ベッドに寝かせてきた」

最後の絶頂…

後ろからも粗相を”させられ”、敏感になった所に一夏に加えて更に”二本刺し”をもらい、全力”全壊”で中を掻き回された「たばねちゃん」…

結果は推して知るべし。

『機人ボディのマスターを”システム・シャットダウン”まで絶頂に導くなんて…毎度思いますが、どれだけ下半身チートもしくはケダモノチートなんですか？』

「いやレイハさんや、そんな人を化物のように（汗）一応、一夏さんも【ナノマシン強化体】だから並みの人間より頑丈ですから…

まっ、それに」

『それに?』

「いつも、レイハやブレハがやってくれる【リンカーコア・ダイレクト・インタラクティブ・フィードバック】方式の戦闘シミュレーションあるだろ?」

『ええ』

「あれを利用して、ちょっと束ねえの性感度を極限まで……」

『悪魔』

「バツサリだあゝっ!」

すると、皮膚と一体化してる右腕のガントレットから、

『お姉様、マスターは悪知恵と技術の悪用を考える時の脳の演算処理速度は天下一品です』

「ブレハもフォローしろよっ!」

『ええ。とてもよく知ってます』

織斑一夏:

何故かデバイスにはいじられ易い（好かれ易い?）体質のようである。

「まあ、冗談はさておいたとしても…」

一夏は少し襟元を正し、

「束ねえの見えるのは…俺があげられるのは、ほんの短い安息の夢に過ぎない。所詮、まやかしの平穩…」あさきゆめみし えひもせず”だ」

一夏が口にしたのは【伊呂波<sup>いろは</sup>】の一節…  
意味は”夢は浅く、酔う暇さえもない”

『ええ』

「目が覚めれば、いつもの束ねえだ。勿論、辛い現実も、いつだって束ねえを傷つける残酷な世界もそのまんま…」

『イチカがマスターを”たばねちゃん”として固定化させる…過去も前世も”根底から破壊”しない限りは、その通りです』

レイジングハートはあっさりと一つの答えを…おそらく、二度と束が苦しむ事のないであろう答えを告げた。

「…真剣に考え悩んだ事はあるさ。でも、できない…例えその方が、束ねえにとって楽に生きれるとわかっていてもさ」

脳裏に浮かぶのは…

「エゴでもなんでもいい。甘いのは自覚してる…だけど、あの笑顔をもう見れないなら…」

” いったくん ”

優しい笑顔…

「俺がこの世にいる意味なんて…ない」

心にトラウマ植え付け、身も心も一部ないし一時でも支配したのは確かに自分だ。

( けど… )

” 溺れたのは、自分 ”

その程度の自覚は一夏にだってある。  
一夏の台詞に嘘はない。

いつの頃からか…いや、もしかしたら最初から、束は一夏にとって【生きる理由の全て】なのだから…

『 So Sweet 』

「だあゝっ！ テメエら姉妹声揃えて茶化すんじゃねえ！！」

『 別に茶化してはいません。やはり、マスターはアーク・マスター

にベタ惚れの骨抜きなのだと再認識しただけで」

『まあ、当たり前過ぎる認識ですが』

「うがぁ~~~~っ！」

やはりイジラれ易いようだ（笑）

\*\*\*\*\*

束が意識を失っている間を縫うように、一同はハンガーへと向かう。

そこに鎮座していた機体……

束の設計図を元に、一夏が”戦闘概念”を追加し、レイジングハートとブレイブハートが、アクシズの全システムを投入して作り上げた【一夏の専用機】……

だが、その”漆黑”に塗られたISは、あまりにも異様で異形だった。

全体のイメージを先に言うなら、4種類の機体の合成機：

最初はガンダムU.C.に登場する3機の主人公機の1機、”クシャトリヤ”。

特に両肩部に装着された自在に動く2対4枚の巨大なフレキシブルバインダーが、特にその印象を強めているのだろう。

だが、上半身のデザインはまた別の機体と印象が似ている。

劇場版ナデシコで天河アキト共々大暴れした主人公機”ブラック・サレナ”だ。

上半身以外にも、バックパックのデザインや、装備された”テイル・アクティブ・スタビライザー”…一夏に言わせれば【スコピオン・テイル】が、その印象を強めている。

また、全体のカラーリングが漆黒な事もそれに拍車をかけているのだろう。

3機目は、ガンダム00の2ndシーズンに出てくる宿敵機の1つ”アルケー・ガンダム”だ。

それは脚部を中心にした下半身のデザインと、バックパックにマウントされた、間違いなくメインウエポンの一つであるうイス程の長さのある巨大な片刃”バスター・ガンソード”に現れている。



ラストは、クシャトリヤに近いデザインと右腕と比べたらと巨大な左腕：多分、それをみればピンと来る人も多いだろう。

その魔獣の爪を彷彿させる鉤爪がついたアンバランスなほど巨大な腕は、”紅蓮聖天八極式”のそれに酷似していた：

見た人間に本能的恐怖を惹起させる禍々（まがまが）しさを、佇んでいるだけで発散する機体：

まるで、一夏の”世界に対する敵意”を具現化したような漆黒の甲冑：

ISとは名ばかりの【異形異能の合成魔<sup>キメラ</sup>】：

その名を、

「よう、【ジャバウォック】：我が愛機にして”純然たる破壊の魔物”よ。ご機嫌麗しそうで何よりだ」

そのデザインや武装、スペック：

ルイス・キャロル著【不思議の国のアリス】に出てくる魔獣に準え  
”ジャバウォック”と名付けられた機体が、どのようなコンセプト  
で作られたのは、一目瞭然だ。  
つまり…

### 【単騎殲滅仕様】

ISに限らず、この世界にいる”全ての敵対者”を攻め滅ぼす為だ  
けに作られた機体だった。

「ジャバウォックよ…我が憤りを怒りを詰め込み生まれた鎧よ…」

ジャバウォックに触れながら、一夏は呟く…

するとどうだろう…

”ウオオオン…”

エネルギー反応がない筈のジャバウォックから、微かな唸り声のよ  
うな音が響いてくる…

「我と共に敵となる者全てを斬り、貫き、焼き滅ぼす魔性の剣よ…」

『マスター…それ以上、”彼女”を悦ばせると、私でも手綱を握り  
きれなくなるかもしれませんよ?』

右腕のブレイブハートがそう促すが、

「いいじゃないか。事実さ」

そして、一夏は両腕で抱き締めるように、自分より遥かに大きなジ

ヤバウオックに触れ、

「ジャバウオックよ…我が鎧にして剣なる古の名をもつ”魔物”よ…」

”ウオオオ…”

「かつてお前が千冬姉と共に感じた怒りを！ お前を創りし束ねえの絶望を！ そして我が憎悪を贅にし、我と共に世界の歪み全てを滅ぼせつ！！」

”ウオオオーーン！！”

刹那、ジャバウオックより放たれる物理的破壊力をとまわない強力な魔力幅射…

それがジャバウオックの意思を示すように、”光り輝く十字架”を為したっ！！

『マスター、やり過ぎです。ジャバは今にも飛び出しそうじゃないですか』

「これでいい…レイハ、最終調整までの所要時間は？」

『あと72時間もあれば』

その言葉を聞くと、一夏はクッククツと喉の奥から絞り出すような笑い声で、

「あと三日…三日で世界は、自分達が住んでいる場所が【ISって守護神に守られた楽園】でないことを思い知るだろうさ…!!」

グツと拳を握り、獰猛な笑みを浮かべる一夏…

『…イチカ、本当にいいんですか？ イチカの計画は、一歩間違えれば夥しい死者が出るでしょう…そうなれば、マスターはきっと哀しみますよ?』

「だろうね…ならレイハ、俺を止める気はあるのか？」

『否。マスターが二つの意味で”故郷”であるあの蒼き星に、大腕をふって戻れるというのなら、何を反対する理由がありましよう?』

レイジングハートの答えに一夏は満足そうに頷き、

「そういうとき。誰よりも大事な女<sup>ひと</sup>が泣き続けてるんだ…今、俺が泥をかぶらなけりゃ、俺はこの先、いつ誰の為に泥をかぶればいいんだ？」

『如何にもマスターらしい、ラヴ臭を隠そうともしない回答ですね?』

何故か声優の伊藤静を思わせる、右腕から聞こえるブレハの声に、

「ブレハ…お前のその一言多い性格は、どうにかならないのか？」

『お姉様譲りですから』

それに対して、レイハがどう答えたのかは記録には残ってない。

だが一つはつきりしてるのは…【世界規模の災害と惨禍】が、もう  
目前まで来ているという現実だった。

織斑一夏…

束一人と世界中の人間の命を天秤にかけたとしても、一瞬も迷わず  
束を選ぶ…

一夏とは、そういう”漢”なのだから…！！



【体験版】第6話 &quot; 獣は魔物の力得て魔獣へと至り、そして兎の儼

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

ついにさせた、”最強にして最悪”のいつくん専用IS

いや、コンセプトは最初からあったけど、デザインと名前が中々決まらない決まらない(笑)

でも、読者の皆様も、素直に白式が出てくるとは思いませんでしたよね?(^^; ;

かなり隠し機能満載で、掛け値無しに【世界を相手に喧嘩を売れるIS】…

果たしてどんな活躍をするのかは、次回以降にて(o^\_^;)b

【体験版】として規格したこの俺束も残すところあと2、3話だと思っています。

正直、【正規版】を描くかどうか迷うところ…

とりあえず、【体験版】を描ききった所で、一度ちゃんと検討し、また読者の皆様にもお伺いすると思いますが、その時は是非に願いますm(\_\_\_\_)m

それでは、また次回お会いしましょう



【体験版】第7話 &quot;飼われた兎は名を呼ばれ、魔獣は兎に溺れて油

皆様、こんにちはー

予定が夕方から夜にズレこんだせいで、昼間のうちに（いや、もう夕方だけ）2本アップできてラッキー  な感じの暮灘です（^^；

さて、今回のエピソードは…

”出陣”前の最後のラヴステージ（笑）ですね

いや、全編ラヴラヴ臭が出まくりです（笑）

というかサブタイにヒントがありますが、二重の意味で中の人的な繋がり、”とある有名シーン”のパロディがあったりします（^^；

そして、珍しく（初めて？）束視点からのシーンが…

すみません（――）

書いてて萌えました（笑）

さて、【体験版】も残すとこあと1話、長くても2話。

【体験版】が終了した後に、ちょっとしたアンケートっぽい何かを

投稿し、そこで暮灘が悩んでる【正規版】の問題点も明らかにしますので、その際にはご協力して戴けると助かります（――）

では、【体験版】ラストの甘々（笑）を楽しんでいただければ幸いです（o^ - ^）b

それは、”旅立ちの日”…

小惑星”アクシズ”にて…

「いつくん…本当にいつちゃうん…だよな？」

心配そうな、そして寂しそうな顔をする束に、一夏はほんの少しだけ覚悟が、束の元からはなれるという事実の前に揺らぐのを感じていた。

「大丈夫だよ、束ねえ。少々力押しになるけど…【IS学園】に入学を認めて貰って、各国の動向と現状のIS技術水準を探りながら、”ジャバウォック”のテストを行う…ただ、それだけだから」

一夏の言葉に嘘は無い。

少なくとも、大まかな過程はその通りだ。

ただ、詳細と『ついでに歪みを駆逐して世界を改造してくる』って文言を伝えてないだけだ。

「それに、定期的に帰ってくるよ。俺とブレハ、ジャバウォックなら、それこそ地球なんて目と鼻の先だし」

努めて隣近所にも行くような言い方をする一夏。

『当然です。マスターが帰る気を起こさないのであれば、私が”強制転移”させてでもアーク・マスターの前にお連れします』

と、右腕からクールな女性の声。

「クスクス　ブレイブハートったら」

と微笑む東だったが、

「…いや、ブレハは半分以上マヂだと思うよ？」

『当然です。それに良く言うでしょう？　悪質な冗談は、本当に実行するともっと面白いと』

「…色々とブレハ話し合わなければ、いや話を付けなくちゃいけない事ができたみたいな気がするけどさ、とりあえず心配は要らないよ」

さらりと一夏が言うと、

「あ、あのね、いつくん…」

「なに？」

東は妙にモジモジしながら、

「ISS学園って女の子ばかりだし、きっと可愛い娘もいっぱいいると思うんだあ…」

『そうだったけ?』と、束と比較つい思ってしまった一夏であるが、

「束さんとしては、浮気はいくらしても構わないんだよ? でも、さ…」

見れば、束の顔はもう真っ赤だ。

(あゝ、もう! 可愛いなあっ!…)

一夏 side -

束ねえは、可愛い。

これは真理であり真実だと思う。

普通でも、いつも束ねえの可愛さにヤラしてる俺が言っただから間違いない。

でも、

(正直、顔を真っ赤にして口元を押さえて上目使いは、反則ですたいつ!…)

スッゴい決心鈍るんですけど…

世界に喧嘩売る覚悟はむしろ急上昇なんだけど、

（束ねえのそばを1秒でも離れる決心があゝっ！）

嗚呼、いつそ世界なんて無視して束ねえと二人、終わらない夢でも見てしまおうか？

キット、タバネダツテソツチノホウガヨロコブサ

オマエガ、”サツリクシャ”ニナルヨリハ

（いかにいかに！）

その甘い囁き…多分、俺の中に残った最後の良心（？）の言葉に、俺は一瞬の乗りたくなる。

だが、それでどうなる？

束ねえを取り巻く世界も変わらないし、もしかしたら、あと数十年経てば”アクシズ”は発見されるかもしれない。

（束ねえや俺にとっては”切実な現実”だ…）

束ねえは、脳のメンテが完璧な機人ボディで、俺は肉体再生能力には自信ありナノマシン強化体…誰かに殺されない限り、二人揃って数十年どころか人間の脳の耐用年数限界（人間の脳は一説によれば、何も無ければ170年間は持つらしい…）までピンピンしてる公算は大きい。

数十年後に小惑星攻略戦なんてやられたら、たまったものじゃない。

（実際、束ねえが【前にいた世界】じゃ、そんな事例いくつもあつたみたいだし…）

確か最初の事例は、ジオン突撃宇宙軍の”ルナツー強襲上陸作戦”…”オペレーション・スコティッシュ”だったかな？

（束ねえのいた地球人が出来たんだ…）

この世界の地球人がやれない保証はどこにもない。

（束ねえが、もう一度故郷を逐われるなんて…）

許せる訳はないっ！！

俺の葛藤を察してないだろう（察しられても困るけど）束ねえは…

「浮気はどんなにしてもいいけど…本気は、ちょっと困るかなあ…  
って…テヘヘ…」

嗚呼…

もうこの女はなんて…

「可愛い過ぎだよ…」束」

俺は気がつくと、束ねえを”束”と呼び、思い切り抱き締めてた…

束 side -

「いっくん…?」

今、確かに…

「束”って呼んだ…よね?」

”束ねえ”でも、”たばね”でもなくて…

「私のこと、束ってちゃんと…ちゃんと名前で呼んでくれたよね?」

いっくんは、少し照れ臭そうに、

「ネタで済ますつもりだったんだけどさ…」

いっくんは、そっと私の首の後ろに手を回して…

”かちゃん”

「えっ…?」

首に緩く巻き付くようにかかる小さな重み…

そして、そこに垂れ下がる金属プレートにそっと触れてみる。



( ” T a b a n e ” … ? )

それは、間違いなく私の名前がローマ字で彫られていて…

首の回りの革の感触と、名前の入ったプレートって…

「もしかして、” 首輪 ” … ? 」

いつくんはニツコリ微笑んで、

「束は今日から…この瞬間から、俺の【飼い兔】だから…俺が飼い主。だから…」

いつくんは私をギュツともう一度抱き締めてくれて…

「もう俺の物だ。束は、俺だけの物だ…」

ずっと、いつくんが好きだった…

でも、私は本当は何十歳も年上で、それに機械仕掛けで…

だから素直に言えなくて…

( だから私を力ずくで求めてくれた時、凄く嬉しかった… )

こんなに世界をねじまけでしまった…

薄汚れた私を、” ただの女 ” として求めてくれた事が…

拒もうと思えば、いくらでも拒めた。

（でも、拒める訳なんてよ…）

心も体も、いつもいっくんを求めてたんだから…

いっくんは、えっちでヘンタイさん

（でも、いつも私の事だけを見つめて、思ってくれる…）

私が一時的におかしくなるくらい、恥ずかしい事をさせて心をボロボロにした理由…

（ちゃんと、わかってるから…）

いっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくんいっくん…

（大好き！！）

だから、

「うん、わかったよ…いっくんが望むなら…私、喜んでいっくんに飼われるよ」

気がつくと、自然にそう口に出してた…

「束は俺だけの物だ…絶対、誰にも渡さない…！！」

もう…  
死んでもいいや…

一夏 side -

首輪なんて、最初は軽い冗談のつもりだ。

ただ、苦笑でもいいから笑って見送って欲しかった。

束ねえに涙で見送られたら、きっと事あることにその泣き顔がちらついて、色々な決心が鈍りそうだったから…

どれほどまやかしの破壊したところで、”束ねえ”が俺の初恋の人で、遠かった憧れの女<sup>ひと</sup>だって事は、何も変わらない…でも、

「うん、わかったよ…いっくんが望むなら…私、喜んでいっくんに飼われるよ」

駄目だ…  
ますます惹かれる…

溺れてゆく…

「束は俺だけの物だ…絶対、誰にも渡さない…!!」

タバネヲキヨゼツスル”セカイ”モ

オレカラタバネヲウバオウトスル”セカイ”モ

みんな滅べばいい…!!

そして俺の腕の中で、束は無防備な…心から甘えた仕草で、

「だ〜から!」メス兎の束”を、最後までちゃんと飼ってね?  
捨てちゃ…やだよ? ”ご主人様”」

”ぶっん!”

すみません。

俺の中で、弾けたら社会的にまずそうな何か、たった今跡形も無く消し飛びました。

「束エエエーッ!!」

「うみゃっ!!?」

その日、俺の出撃は予定時刻より12時間も遅れた…

何があつたかなんて野暮な事は聞くなよ？

ただ、束が見送れる状態でなく…

デバイス・シスターズには散々イジラれた事だけは書いておく。

【体験版】第7話    &quot;飼われた兎は名を呼ばれ、魔獣は兎に溺れて油

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_\_)m

婚約指輪ならぬ”契りの首輪”だった今回は如何だったでしょうか？(^^; ;

正直、束視点で彼女の心情がちゃんと描けたかどうか、激しく不安です(汗)

ぶっちゃけてしまうと、ラストシーンの前に、物語のベーシックである【一夏と束の愛】を再確認の意味を兼ねて描いてみたかったつて言っのが、本音です(笑)

さて、いよいよ【体験版】もラストスパート！

もしよろしければ、最後までお付き合い下さる事を祈りつつ…

それでは、また次回お会いしましょう(o^\_^)^b

【体験版】第8話    &quot;かつて兎は甲冑の二つの心臓を語り、かくて魔

皆様、こんにちわー

ちよつと予定が色々錯綜し、混乱気味の暮灘です（^^；

さて、今回のエピソードは…

いよいよラストシーンへ向けて走り出した、的な話かと思いきや、  
一見するとコメディ全開な過去なんだけど、実はISの重要情報が  
微妙に入っていたり…

いえ、すいません（――）

実は、とある読者様のご感想への返信を流用して、可愛い束ねえを  
最後に書いてみたかったのが本音ツス（；^ー^A

そして、後半はまだ【地球のISが至つてない筈の機能】を、一夏  
& a m p ; ブレハ& a m p ; ジャバは披露します（o^ - ^'）b

しかし、この機能は本来…

一夏（魔導師としての訓練を受けたナノマシン強化体）+ブレイブ  
ハート（サポート・インテリジェンス・デバイス）

という組み合わせで初めて使いこなせる…筈なんです、それを無

視して使いそうなキャラも（；^| ^A

そんなエピソード感じのですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^  
, ^） b



(そういえば…)

昔、束ねえにこんなレクチャーを受けた事があつたっけ…

\*\*\*\*\*

「いつくん、ISがどうしてあんな巨大に力をだせるかって考えたことある？」

「…束ねえが前にした説明だと、ISの【コア】に使われてる”レリック”が、地球上に人類が無自覚に充満させ続けた【拡散魔力】を吸って圧縮、蓄積…一種の”魔力コンデンサー”として機能し、物理的には有り得ない程のエネルギー…”物理変換された魔力”を供給してるから…じゃなかったっけ？」

「パーフェクト    さっすがいつくん    あつたまいい」

そりゃあ束ねえの言った台詞は、地球の機材じゃ計測不能な記憶容

量を誇るブレハに一言一句逃さず記録して、暇があれば再生してま  
すから

ん？ 今、キモいつて言つた奴…誰だ？

それは、束ねえの愛らしい姿と声を知らないから言える台詞だぜ？

いいか、よく聞け…

束ねえのルックスをよく説明してやる！

まず基本は…

【パステル・ピンクのワンピース＋少女趣味丸出しのフリフリのつ  
いた真つ白なエプロン】

がデフォだ。

バリエーションはスカートならミニ／ミドル／ロングがあつて、袖  
も長短だけでなく色々なデザインを持つてゐるんだぜ？

勿論、束ねえに死ぬほど似合う純白のエプロンも、フリルの形や大  
きさ様々な種類がある。

しかも、

「今日はお掃除だから、ミニの方が動きやすいかな？」

みたいな感じで、その日の気分で取っ替え引っ替えしてるのさ。

だが、凶悪（な可愛）さはそれだけに止まらない。

足はやっぱり白がメインのニーソやストッキング＋ガーダーベルトの最強コンボ！

個人的な主観だが、束ねえにはパンストは邪道だ。

これらのストッキングやソックスには当然、ローヒールやパンプスが組み合わされる。

下着は白、パステル・ピンク、白とピンクのストライプの何れかで、デザインはシンプルで可愛い系が好みだ。

ん？

今、子供っぽいって思わなかったか？

フフ…甘いな。

【とある魔術の禁書目録】って古典文学（作者注：IS世界は近未来なので、一部のラノベは我々が明治時代文学を見る感覚）を知ってるか？

あの作品に出てくるオルソラ・アキナスに、月読小萌の服を着せた時を想像してみると、分かりやすいかな？

なんかこう…

背徳感っていうか、犯罪臭がプンプンして…妙に”そそられる何か”が、頭と心と魂に來ないか？

もし来るのなら、きつと俺と分かり合えると思うな。

だが、束ねえの最強にして最凶の萌武装（笑）は、頭上にこそある…

そう、あの”トレード・マーク”さ。

再会した時は、【メタル・ウサミミ】って呼びたくなっただけど、外出時（臨戦体制）の広域センサーとして機能しているらしい。

束ねえに言わせれば、

『兎の耳が長いのは、遠くの小さな物音と聞こえてきた方向を、より正確に捉える為って理由があるんだよ？ 束さんのウサミミもおんなじ 私は本来、超遠距離砲撃型だから、やっぱりより遠くのより正確で精密な”ターゲット情報”がいるんだよ』

だが、狙われる心配のない”アクシズ”では、だ。

何というか…その、束ねえのメタル・ウサミミって、待機状態ではガチで…

”白い普通のウサミミ”なんだよぉっ！！

束ねえに言わせれば、

『だって…こっちの方が可愛いよね？』

しかも、束ねえのウサミミは、俺とブレハの生体融合みたいに、機人ボデイに直接ビルトインされてる物…

束ねえの感情や歌声や仕草に合わせて、ピョコピョコ動くんのだぞっ！？

ちょっと想像して欲しい…

ピンクのワンピース＋白いエプロンを着た束が、鼻歌を歌いながらオタマでシチュー鍋をかき回しながら…

「今夜はいつくんの大好きなシチューだぞ〜い」

なんて楽しそうな鼻歌や手の動きに合わせて、白いウサミミがピコピコ動いてる姿を…

シチューと一緒に兎を食べなくなる俺は、正常だよなっ！？

「お〜い！ いつくん、聞いている？」

”ハッ!”

どうやら俺はヘブンズ・トリップしてたらしいな……  
げに恐ろしききは……

「束ねえの可愛さ……」

「みやつ!?!」

ぴーん!と跳ね上がるウサミミと真っ赤になる束ねえ……

何この愛くるしい生き物……?

「いいい、いつくん!? い、今は授業中だから、そ、その……」

「あつ、ごめん! 構わないから続けて」

「う、うん……えつとね、さっきいつくんが言ったコアの出力だけじゃあ、ISの最大出力は捻出できないんだよ。確かに”エネルギー保存の法則”には縛られないISだけど、【魔力の物理力変換係数】には縛られるから……」

「つまり、何処からか持ってくる……って事かな?」

「正解 じゃあ、どこから持ってきて来ると思う?」

一夏は今度こそお手上げという顔をするが、束はイタズラっ娘のよ  
うな顔で、

「束先生は、前にISのコアを起動させる条件は、”何の出力”が

必要で言ったっけ？」

一夏はハツとした顔で、

「リンカーコア」！

「またまた正解」

と、束は一夏が覚えていた事に嬉しそうに微笑むと、

「いつくん、ISはね、そもそも【ツイン・ドライブ構造】で設計されてるんだよ」

「ツイン・ドライブ？」

聞きなれない単語に首をかしげる一夏だったが、

「簡単に言えば、リンカーコアがジェネレータやリアクター、コアはコンデンサーであると同時にアンプやブースターなんだよ」

あんまり簡単には聞こえない束の説明に、

「…どゆこと？」

「ん〜とね…魔導師が、自分のリンカーコア出力以上の魔法攻撃をしようと思ったら、大抵はある方法を使うんだよ」

束は、一度言葉をきると、言葉を探すような仕草をして、

「それは”集束魔法”って方法なんだけど…自分の周囲にある魔力全てを術式でかき集めて圧縮／使いやすいように変質させて自分のリンカーコアの産み出した魔力に相乗、【魔力合成魔法】として使う方法なんだけど…」

その単語の羅列を咀嚼した一夏は素直に、

「それ、ドーピングとかオーバーブーストとかと似たようなヤバげな匂いがプンプンするんだけど…」

すると、束は『タハハ…』と苦笑いして、

「うん。確かにあんまりお勧めはできないかな？”反動”…使った時の体への負荷が大きすぎるし…人間の体って本来、リンカーコアから自己精製される魔力に対する強度しか持ち合わせない筈だし…」

厳密に言うなら、一瞬だけブーストする集束魔法ならまだしも、体の魔力体制に見合わない魔力幅射を長時間浴び続けると、かつての”八神はやて”やこの世界の束のように【魔力侵食】を引き起こし、命に関わる事態になるのだった。

「でも、束せんせーが”なのは”だった頃の得意技って、まさにその集束魔法砲撃だったりして…テヘッ」

「束ねえ…」



「あゝん！　いつくん、そんなにジト目で見ちゃいやあゝ。と、とにかく話を戻すけどね、」

束は慌てて話題を戻し、

「その集束魔法のメカニズムをモデリングして、フィードバックによる負荷を術者じゃなくてISにかかるようしたのが…」

「ツイン・ドライブって訳だ」

一夏の解答に満足そうに笑んだ束は、

「正式名称は”デュアル・マギリンク・ツイン・ドライブ（DMTD）”：“高町なのは”が、レリック技術の大家”ジェイル・スカリエッティ”と共に基礎理論を構築しながら、遂に完成には至らなかったシステムだよ…でも！」

束は大きく胸を張る。

ついでに乳が”たゆん”と揺れ、一夏がそれをガン見たのは言うまでもない（笑）

「この世界の篠之ノ束さんは、ついに完成させたのだよっ…！」

それは時を越え、世界すら飛び越えて受け継がれた【技術の結晶】…

そして、なのはと束…

二人で一人の少女の夢…

\*\*\*\*\*

(そう…)

「高町なのはと篠之ノ束の”技術と夢の結晶”だった筈なんだ…」

「ただ、それが世界を歪めたという、【歪んだ現実】…

「ブレハ、ジャバウォック…」

『どうしました?』

「束ねえの夢を踏みにじった世界の歪みは、正さねばならない…そうだな?」

『それがマスターの望みであればこそ』

「いい返答だよ」

一夏は苦笑し、

「じゃあ、征くとするか…!!」

『マスター。”転移魔法”で一気に跳びますか?』

「いや、今は下手な魔力消耗は避けたい…」

(地球で”挨拶”する余力はあればあるほどいい…)

一夏はイメージ投影される蒼き星を睨み付け、

「物理システムによる”疑似ボーズ量子化”と、魔法による”重力レンズ加速”を併用した【量子跳躍<sup>クァンタム・ジャンプ</sup>】を選択。”フェルミオン(実体)化”は、地球静止衛星軌道上の任意のポイントを算出し、設定」

『了解：座標プリセット完了』

「ブレハ、速い仕事だ…デュアル・マギリンク・ツイン・ドライブ、エンゲージ!!」

『シンクロナイズ・マギリンク・デュアルコアシステム、リンカーコア並びISコアを正常認識。リンカーコア精製魔力、ISコアに<sup>イーマル・ブースト</sup>通常加圧…クァンタム・ジャンプ可能まで後74秒』

そして、その時は来た…

（征くぜ…東との平穏な日々をこの手に掴む為にっ！！）

「ジャンプ！！」

『Yes , マスター』

その日、1機のISが”アクシズ”より消えた…

それは、銀河レベルで見れば些細な…

だが、地球の…

人類の歴史にとっては、あまりに大きな出来事だった…

【体験版】第8話    &quot;かつて兎は甲冑の二つの心臓を語り、かくて磨

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

ISのメカニズムが明かされる回で、実は人間のリンカーコアもエンジンの一部だったってオチでした(^^;) ;

実は、この設定があると、【ISの固体出力差】を説明しやすいというメリットが(笑)

とりあえず、現在公開できる【俺東IS基礎俺設定(笑)】は、これでラスト…じゃないかと(^^;) ;

そして、いよいよ地球へ旅立ついつくん…

って、いきなし量子跳躍するジャバウォック(笑)

コイツら、最初から規格外のスペックを隠す気ねえな(\_\_\_\_)と(\_\_\_\_) ;

さて、どうやら今回は最低でま【体験版】のラスト・バトル…果たして、どんな暴れ方をしてくれるのやら(^^;) ;

それでは、また次回お会いしましょう(\_\_\_\_)



皆様、こんばんわー

何とか、日付の変わる前に更新が出来そうでホッとしてる暮灘です  
(^^; ;

まずは、活動報告【重大報告：本日、手術します。】をお読みくだ  
さった皆様、心配なさってくれた皆様、暖かい言葉を書きこんでく  
れた皆様：

父の手術は、”とりあえずの成功”、”70%の成功”と呼べる物  
で、まだ術後の経過を見ないとなりませんが、直ぐにどうこうとい  
う状態では無くなりました！

この場を借りて、先ずは感謝を。

ありがとうございますm(\_\_\_\_\_)m

詳細は後日の活動報告、書き込んで頂いた皆様へのお礼の返信も翌  
日以降に回させていただく事、ご容赦を。

おそらく暮灘の健在をアピールできるのは、作品を書く事だけです

から。

今回のエピソードは…

【体験版】の最終回の予定でしたが、地球降下からの流れが思ったよりポリュームが増えてしまい、最終回は次回以降に持ち越しとなつてしまいました（^^；

ですが、”今の暮灘に描ける最大限に格好いいチームー夏（一夏、ブレハ、ジャバ）”は書けたつもりなので、ご堪能いただけたら幸いです（o^\_^）b



Just Get Buck Peaceful days...

(ただ、平穏な日々を取り戻したいだけ...)

どれほど酷い雨に撃たれても...

色褪せない熱い想い...

身体<sup>からだ</sup>にみなぎらせ...

かつて少年だった者は帰ってくる...

” 災疫の魔獣 ” としてっ!!

地球、静止衛星軌道上

「地球<sup>テラ</sup>よっ！ 俺は帰ってきたあーっ!!」

『マスター、ジャバウォックに核バズーカは搭載してません。それに、その台詞はアーク・マスターの記憶によれば、宇宙歴0083【“レビル・フリート”の叛乱】時、ソロモン襲撃犯の核テロリスト、”コウ・ウラキ”が発した台詞です。あまり縁起がよくありません』

「固いこと言うなって。そういう気分なんだ」

『で、マスター…どういふプラン行くんですか？ このまま、量子跳躍や転移魔法で地上に降りるとは思いませんが』

それはそうだろう。

もしそうなら、最初から量子跳躍で地上に降りてるだろうから。

「地上でISの可能性を勝手に狭めてる連中に、再認識させるのさ…本来、ISがどこで使われるべくして開発された物かを、なっ！  
！」

『具体的には？』

「ブレハ、マルチ・ロツクオン・モード！ ターゲット選別、非核動力型軍用人工衛星を質量／容積順に選択！ ”アクセル・シューター”で現状点から照準可能なそれを選別！」

『イエス。マスター』

「”人工の流星雨”をバックに、正面から大気圏降下だ。誰からもよく見えるようにな！」

『派手な演出ですね?』

「嫌いか?」

『まさか。ターゲット、オール・ロックオン・コンプリート』

「Ok…アクセル・シューター、マルチ・ショット!」

もし、貴方が宇宙世紀のMS乗りで、そしてISがMSだとしたら、きっとそれは全身に装備された無砲身タイプの偏向メガ粒子砲の一斉射撃を連想させたであろう。

そう想わせるように、IS”ジャバウオック”の全身に、一夏の魔力がツインドライブで増幅&amp;圧縮されて具現化した”白い魔力光球”が精製され…

『Stand-by, Ready』

「Fire!!」

『Salvo Burst（一斉射撃）』

その瞬間、白い光球が白光の弾丸となりて一斉に放たれたっ!!

束のかりキュラムはIS関係が大半を占めていた為、一夏は”魔導師として”は、さほど手札が多い訳ではない。

基本的に使える攻撃手段は威力の割には燃費が良く誘導や多弾同時

射出等の機能付与がしやすいシューター系、光線系の技で貫通力／威力共に高くバリエーションの多いバスター系、そして破壊力に特化した大技のブレイカー系の3つだけだ。

一夏の使った魔法弾は、マギカ・ブリット基本となる「デイベイン・シューター」の上位技で、文字通りシューター（光弾）をアクセル（加速）化させる事で貫通力を上げると同時に、誘導能力を付与した場合には追従性や命中精度を格段に上昇させる技だ。

しかも、一夏はシューターに誘導能力だけでなく爆発属性（命中／表面貫通で内部に潜り込んだ後、エネルギーが残ってれば一気に解放する）を付け加え、シューターは一種の誘導”炸裂徹甲弾”として機能していた。

一夏とブレイブハート、ジャバウォックは”通常モード”でさえ、65556目標を捕捉し、1024目標を同時追尾し、その中の32目標に対して32発のアクセル・シューターを同時発射する事ができる。

しかも、トラック・ワイル・スキャン：32発を発射したらそれで終わりではなく、シューターが1目標を撃墜する度、新しいターゲットが追尾されてる1024目標の中から選択され、新たなシューターがロックオン・シュートされる仕組みになっていた。

そして、衛星の破壊数が50を超えた辺りで、

「ブレハ、十分だ。”弾幕”が薄れないうちに突っ込むぞ！」

『Yes , All Right』

ジャバウォックを、機体の姿勢とスラスターの向きを変え、

『マスター、”エクステンション・シールド”ならびに”ディストーション・フィールド”展開完了。オール・システムズ、コンディション・グリーン』

一夏は一度大きく息を吸い…

「ガンホー！！ Y h a h ！！」

それは何とも世紀末的な光景だった…

砕いた50の人工衛星の破片…鋼鉄の集中豪雨の中を、空気抵抗で周囲を赤熱化させた”漆黒の弾丸”が、音速の10倍を超える速度で大気圏を切り裂き、突入してくるのだから！！

\*\*\*\*\*

その時、間違いなく世界は混乱していた。

スパイ衛星や偵察衛星が突然、音信不通になったかと思えば、それが地球に降り注いできたのだから。

大半は、大気との摩擦熱で燃え尽きると思われたが、中には燃え力スになるのら不可能で、明らかに地表に被害を与えそうな大きさも相当数あった。

そして、スクランブルで発射される対空迎撃ミサイルや発進する”メテオ・スライパー対隕石”装備の戦闘機、そして各国のIS…

誰しもが文字通り”降ってわいた天災”に、忙殺されてる最中…

『全人類に告ぐ。我は”織斑一夏”。地球の如何なる国家にも所属しない”アクシズ”よりの特使にして…』

”SOUND ONLY”という文字が浮かんだ軍用、民用を問わない全ての通信画面から、突然”それ”は流れた…

『全ての歪みを断ち切る”篠ノ之束の剣”なりっ！！』

\*\*\*\*\*

太平洋某所

上空11,000m

本来、”そこ”は太平洋（平和な海）という名前を具現化したようなポイントだった。

何処までも広がる蒼い空と碧の海…

大自然の雄大さと美しさが、水平線の向こう側まで続く場所…

しかし、この地球という星に住む、国家や所属に関わらず、軍に係した者全てに、そのポイント（座標）は、特別な意味を持っていた…

何故なら、そこは【世界の軍事的常識が根底から覆された場所】…

古き良き時代の…男が軍隊の主役だった時代の【終焉の地】…

そう…

”白騎士事件”の発生座標だった！！

「そして今、篠ノ之束博士の名代として、現状における世界各国各勢力のIS技術を確認するため、此処に馳せ参じた！！」



そう、一夏とブレイブハートが衛星を破壊したのは、何も”演出”や、地球のスクランブル迎撃システムを飽和状態にする目眩ましの弾幕という意味だけではない。

実は、破片のスクランブル迎撃時の通信指揮統制用の政府や軍のエンジニア・エンシー・情報ネットワークを計測／追尾／逆算し、その最も支配力の強い回線で、軍官民を問わない世界の主な通信チャンネルを乗っ取ったのだ。

それを用いて声明を発していたのは【平和な時代の墓碑】…少なくとも、一夏がそう考える”運命の場所”だった。

（ここから全て…世界の歪みがここから始まったというのなら…）

「それを断ち切るのも、ここから始めないと…」

『マスターなりのスジの通し方…と、解釈してよろしいですか？』

「ああ。人間っていうのは、ブレハやジャバに言わせれば非合理の塊みたいに見えるかもしれないけど…それが人。いや…」

一夏は、口の端を歪め、

「それが”俺”だ…!!」

『なるほど…理解はできませんが、理解はしました』

「????」

不思議そうな顔をする一夏に、ブレイブハートは、何故か笑ったような気配と共に、

『大した事じゃありません。ただ、私もジャバも、そういう我々には無い非合理さが嫌いではないと理解しただけです』

「ブレハ…」

『それよりマスター。要求の突き付けが残ってます』

「そうだったな…!」

ブレイブハートの出した”マイク接続、OK”のサインのもと、

「我が要求は、ただ1つ!! 世界の如何なる組織/国家の介入も許さぬ”IS学園”への滞在と編入の許可を求めるものなりっ!!」

そして、虚空を睨み付けるように、

「返答やいかにつー!!」

\*\*\*\*\*

『マスター、素直に要求を飲むと思いますか?』

「まさか! 素直に飲むくらいなら、”白騎士事件”も起きなければ、束ねえが地球を逐われる事も無かったさ」

『なるほど…道理ですね? 早速、リアクションが有りました。空対空、地対空、艦対空型のミサイル多数接近。数は2341発。おそらく、搭載されてるのは自己鍛造散弾式の対ISクラスター(多弾)弾頭でしょう』

ブレイブハートの分析に一夏はつまらなさそうに「フン…」と鼻を鳴らし、

「飽和攻撃でシールドを削ろうって事か。大方、強引に武力対処を

強行したのは、IS開発から外されて冷や飯食らいに回された兵器産業と、そこから献金を受けた高級軍人だろうな」

『もし破壊できたなら、【あの篠ノ之博士の最新鋭ISも撃破できた】とIS無敵論の破綻を喧伝し、兵器開発の天秤を再び自分達に傾け、よしんば破壊できなくとも、生け捕りないし戦闘データの収集だけでも出来れば自分達もIS開発に加われ、上手くすれば現行のISメーカーからリードを奪い、再び兵器開発の主役に返り咲く…というところですか？』

一夏は皮肉げに唇を歪め、

「いかにも俗物風情が考えそうな事だろ？ でも、まあ…」

笑みに獰猛な何かを混入しながら…

「連中の思い通りに動いてやる義理はないよな？」

きつと、いまの一夏を見たらあなたは驚くだろう…

地球の衛星軌道上に現れた瞬間から、瞳に燃え盛るような熱く鋭い眼光を湛えた一夏だったが…

体内に山ほど注入したナノマシンの影響だろうか？

その両目は、複雑な光彩を描く”金色”に輝いていた…

戦いはまだ終わらない。

地球人類が織斑一夏という存在の力を知るには、まだステージ（舞台）が足りていなかったのだから…

【体験版】第9話    &quot;黒き魔獣は安らかなりし時代の墓碑の空へと舞

皆様、ご愛読とご心配、励ましのお言葉をありがとうございました  
m (——) m

とりあえず、活動報告へのご返信は明日に回させて頂き、本日は投稿を優先させていただきました (——)

感謝の言葉をお返しするのも大事ですが、待っている皆様に作品をお届けするのも大事と考え、このような判断となりました。

さて、今回はバトルシーンの後半戦…おそらく今度こそ【体験版】のラストになると思います。

そして、可能なら【正規版】執筆に関する問題点を提示した上でアンケートを取りたいなと (^ ^ ;

それでは皆様、また次回お会いできることを祈りつつ、改めてありがとうございました (——)

【体験版】 最終話 &quot;・おお、この世は素晴らしき場所なればこそ、

皆様、こんばんわー

本来ならこんにちわー の時間にあげられた物を…【なろう】の誠意の感じられない対応に、ブチ切れかけてる暮灘です（――）

さて、記念すべき最終回に、まさかこんなオチ（詳しくは、10/27の活動報告にて…）になるとは思いませんでした…

とりあえず内容は、本当に【プロローグ・エンド】っばいです（＾  
＾；；

そして、一夏とブレハ、それにジャバの強さや禍々しさが出てればなあゝと（＾ー＾；）

実はこの後、とある原作ヒロイン視点からのエピローグにあたる【EXステージ&amp;アンケートハガキ（笑）】をアップしたかったんですが、冒頭の事情により時間的にもテンション的にもかなり厳しくなりました（泣）

頑張っても今夜遅く、遅ければ明日のアップになってしまいそうです、お待ち頂ければ幸いですm(\_\_\_\_)m

実は、読者の皆様のご意見を聞いた上で、【正規版】を書くかどうか決めようとおもいました( ;^\_^A

ご協力いただけたらとても助かります



【体験版】 最終話 &quot;・おお、この世は素晴らしい場所なればこそ、

蒼き星に火を放て！

紅蓮の炎で染め上げろ！！

歪みを薪にし窯にくべ、新たな創世を生み出す為に…

全てを燃やし尽くすのだっ！！

\*\*\*\*\*

一夏の双眼が金色に輝く…

それは、ある事象を意味していた。

つまりは、”体内注入ナノマシンの活性化”だ。

目は人体の中でも特に神経の集中する場所：

人間の神経にそってニューロン・ネットワークを形成する一夏のナノマシン、一種の”魔導式量子アセンブラ”が瞳に集中するのは当然だ。

そして、ナノマシンが活性化する時は、高速演算処理の為に擬似的に”光ニューロ・バイオチップ”型の集合分散量子脳を擬似的に構築する為、僅かな発光現象が起きる。

一夏の体内注入ナノマシンが活性化してる理由は、ジャバウオックならびにブレイブハートから、魔導式アナログ・イメージ情報としてリンカーコアへ、デジタル数値情報として非接触インタラクティブ（双方向）・インターフェースとしても機能ナノマシンへとそれぞれ流出入を繰り返していた。

魔導師として訓練を受けた為、”マルチタスク”が可能となった一夏の脳は、リンカーコアよりの情報処理に集中し、機械的な情報はナノマシンが擬似的に構築した量子演算集積回路で処理する…

では、これ程膨大な演算能力を使い、一夏は何をしているのだろうか？

皆さんは”バース・アイ”という言葉をご存知だろうか？

日本語で言えば、”俯瞰”ふかん：つまり、【自分を中心にした全方位三

次元画像を遙か上空から第三者的（鳥が上空から自分を見る視点）に見てる】ことだ。

そう、一夏の金色の瞳は、普通の”人間としての視野”以外に、全方位から自分をめがけ飛んでくる2341発のミサイルを、詳細なデータ+発射された後の航跡と予測進路付きで”見て”いたのだった。

一夏は、微動だにせず、おもむろに告げる。

「”デイバイン・シューター【ファランクス・シフト】”」

『Y e s , M a s t e r 』

ブレイブハートの返答と同時に、ジャバウォックの周囲に32個の魔力球体オーブが生成される。

ちなみに32という数は、ジャバウォック本体表面に埋め込まれた”赤色魔眼”ルビー・アイと呼ばれる赤い結晶状の【魔導式多目的発生器】の数と一致する。

ジャバウォックの周囲に32個展開した白く輝くオーブ…

それは、先ほど衛星群に放った”アクセル・シューター・マルチ・

ショット”の発射光景に似ているが、全く違ふところが2つあった。1つは、オーブが直ぐに弾丸状になり射出されたが、今は時折位置を移動しながら周囲に浮遊してるだけだ。

もう1つは、その大きさだ。

アクセル・シューターの時は、精々ソフトボール大だったオーブが、今はバスケットボールよりも大きい…

『マスター、弾種はどうします？』

「貫通後に炸裂のAPHE（炸裂徹甲弾）モード。ただし、炸裂時のエネルギーの半分を電気変換」

『ラジャー』

ISと聞いて皆さんは普通に”インフィニット・ストラトス”と考えるだろう。

しかし、篠ノ之束が高町なのはだった頃…ISという略語には、全く別の意味があった。

それは、”インヒューレット・スキル”…  
戦闘機人達がもっていた”先天的固有能力”の事だ。

おそらくは【多くの平行世界】を知る皆様の事だ。

今は時空世界アイドル・ユニット【にゃん ばーず】として活躍してるだろう彼女達12人姉妹の一人が、【イノームス・カノン】というISをもっていた事を覚えておいでだろう。

【イノームス・カノン】とは、”自らイメージした性質の砲弾を精製する能力”の事だ。

そして、それを機械工学的に再現し、徹底的に機能拡張した物が、32基の”ルビー・アイ”の複合統制システム”シャブラニグドウ・ユニット”に搭載されていた。

そう、少なくとも【魔法攻撃】では、ジャバウォックは術式を複合的に割り込ませる事により、”本質を変えないレベル”ならば、様々な種類の属性や特性を付与する事ができるのだ！

『マスター、イン・カミング・アワー・レンジ（敵弾、我らの射程に入りました）』

「オール・フランクス、オープン・ファイヤッ！！」

『Rapid Barrage, Start（速射弾幕、開始）』

もし、あなたがこの戦いに全くの無関係で、尚且つこの戦いを見る立場にあったのなら、きっとこれは素晴らしい見世物に映っただろう

う。

何しろ32基のオーブから毎秒8発のレートで純白の光弾が放たれ、その弾が弾道修正（誘導ではない）しながら次々とミサイルの先端に飛び込み、内部で炸裂し誘爆させるか、炸裂と同時に発生した高圧電流で内部の電子機器を焼き切り、撃ち落としていくのだ。

射撃時間は約12秒。

発射されたデイベイン・シューターは3000発超…

そして、空には…

『マスター、全弾撃破を確認しました』

「第二波は？」

『今のところ、その予兆はありません』

空にはただ、漆黒異形のIS…ジャバウォックのみが残っていた。

たった12秒で、小さな国の国家予算に匹敵する額の高価なミサイル群を無価値な鉄屑に変えたそのISは、驚いた事に射撃開始から1mたりとも動いてない…

「圧倒的ではないか…我がジャバウォックは」

『統合参謀長時代のギレン・ザビのパロディなら問題ないでしょう』

ちなみにこの台詞、一年半戦争末期、最後の天王山である”ソロモン防衛戦”に勝利したジオン軍が、ソーラーレイによる超遠距離砲撃でジャブローを焼き払った時の台詞のパロディだ。

「ところでブレハ…データリンクから、ミサイルの発射基地、母艦、母艦の特定はできたか？」

『当然、終了してます。セキュリティ・コードも掌握済みです』

あの演算能力は、何も”たかだか”2000発ちよつとのミサイルの迎撃の為に使われていたのではなかった。

その2341発のミサイルにデータ送信して、中間誘導を行なっていた”発射元”を特定する為にも使われていたのだ。

「上出来だ。なら、発射元にある全弾を起爆。ただし、通常弾頭のみだ」

『ラジャー。気化爆弾やナパーム弾は通常兵器に入れて構いませんね？』

「ああ。構わない。1発残らず吹き飛ばせ。徹底的に跡形もなく…な！―！」

『イエス、マスター。世界中で”汚い花火”を打ち上げます』

ブレイブハートの言葉通り、ジャバウォック…織斑一夏に向けミサイルを放った全ての施設、艦船、航空機が…

ある物は地下や土台から吹き飛びクレーターとなり、ある物は乗員が誰一人脱出する前に轟沈し魚の餌と住処になり、またある物は宣告通り”汚い花火”となり破片を地上に叩き付けながら飛び散った…

おそらく、これをサイバー・テロと捉えるなら、史上空前の規模の…少なくとも、たった一度のテロで最も多くの軍人を二階級特進に追い込んだ事例であろう。

159

「全世界に告げる。以後、私に対する全ての戦闘行動は、織斑一夏のみならず”アクシズ”に対する宣戦布告とみなす」

そして一呼吸置くと、

「これは最終通告だ！ 以後の譲歩や妥協は一切無いと心得よう！！  
俺は全面戦争も辞さないと言っているっ！！！！」



それから5分後。

世界IS最高評議会において、満場一致で織斑一夏を”アクシズ”という未確認勢力ではあるが、特例として特使と認め、一種の治外法権である【IS学園】への無期限滞在が認める声明が発表された。

そう…

世界はたった一人の人間と、たった1機のISの前に屈伏する形となった…

今、あなたは歴史の証人であり、目撃者となった…

なぜなら…

これが後に”白騎士事件”と対に語り継がれる…

## 【黒騎士事変】

の全貌なのだから…！！

世界は、少なからず混乱した。

世界各国は、只の一度のクラッキングで破壊された兵器や施設の再生産や穴埋め、更に殉職した将兵達への遺族見舞金だけでも頭の痛い問題だろう。

マスコミ対策とせねばならない。

集団心理と情報操作に踊らされる大衆とは、常に不安定な物だから…

しかし…

『あの圧倒的な力…” あれ” を手に入れば、我が国はっ！！』

『男のIS乗りだとっ！？ クックククッ…DNAサンプルの一欠片でも入手できれば…』

『『『』』』』なんとしても、イチカ・オリムラとあの黒いISを手に入れるのだっ！！ 手段は選んでいいっ！！』』』』

世界は少なからず混乱していた。

しかし、それでも変わらない…

いや、変わろうとしない物もあるし、者もいる…

しかし、人よ忘れる無かれ…

一夏が愛しき飼ひ兎を置いて、何故に”楽園”を飛び出たのかを…

一夏は言う。

自分は、篠ノ之束の護り刀だと…

束を傷つける全てを断つ剣だとっ！！

そして今…

剣であり、黒騎士でもある…

”魔獣の叙情譚”

が幕を開けようとしていた…！！

T o b e … ?

【体験版】 最終話 “おお、この世は素晴らしき場所なればこそ、

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

とりあえず、一夏や束視点で語られる【体験版】は、これで一旦終了となります。

最後は、ド派手に極めたつもりですが…

一夏&amp;・ブレハ&amp;・ジャバの”三位一体の強さ”は上手く伝わりましたでしょうか？(^^; ;

何か小説の”外側”で色々有りすぎて、普通と違う意味で幸か不幸かとも思い出深い作品になってしまいました(\_\_\_\_)(^^; ;

そして何より…

とりあえずでも、こうしてゴールに辿り着けたのは、皆様のご声援やご感想があったからです！！

改めて、今までご愛読をありがとうございました！！m(\_\_\_\_)m



【体験版】

EXステージ&quot;サムライ・ピッチ&quot;;

&

ア

皆様、本日二度目のこんばんわーの暮灘です。

改めまして、”俺東”を今までご愛読くださり、ありがとうございました  
ましたm(\_\_\_\_)m

勢い任せで書いていたら、予告していた【EXステージ】が完成してしまつた(何故に!?)ので、書いて頂いた感想に返信する前になんですが、緊急アップさせていただきます(\_\_\_\_)

また後半のアンケートハガキ(?)が後書きを兼ねているので、今回は後書きを割愛させていただきます。

もし、皆様のご意見を聞かせていただけたら、暮灘は本当に助かりますm(\_\_\_\_)m

【体験版】

EXステージ&quot;サムライ・ピッチ&quot;;

&

ア

欧州某国、とある街の路地裏…

（何故だ…なぜ振り切れない）

自分を追い掛けてくる不気味な気配に、その女は恐怖で顔を歪ませていた。

（どうして、この私がおめおめと逃げ出さないとならないっ!？）

”彼女”には、今回のテロを成功させる絶対の自信があった。

自分には、違法改造で強化したISはあつたし、世界各国の警戒網は”黒いIS”の一連の騒ぎの余波を受け、混乱を極めていたからだ。

男が自分と同じISを使い、非公式ながら現在確認されてるあらゆるISよりも高い性能を発揮したという事実は、腸が煮えくりかえる程腹立たしかったが、今回の”仕事”に関してだけは、毛先程には感謝してもいいと思っていた。



「だけど…！」

どこをどう間違えたのか、自分はテロを成功させるどころか、まるで地面に這いつくばるように、不様に逃げ回っているのだ…

（全部、”あの音”が聴こえてからだ！）

”あの音”が聴こえて瞬間から、全ての歯車は狂いだしたと彼女は考えた。

その時だ…！

”リンッ”

”ゾクッ…！”

その”鈴の音”が背後で聴こえた瞬間、純粹な恐怖が背中を走り抜ける！

反射的に振り返った彼女の眼前に迫っていたのは…

「なんだ？ 鬼ごっこはもう仕舞いか？」

【それ】は、傍目には背が高く美しい、【ただの少女】にみえる。

整った顔立ちに冷静沈着な光を湛えたややツリ気味の涼しげな目元…  
ポニーテールに結わえた絹糸のように艶やかな長い黒髪とIS学園  
の純白の制服が、暗がりにもなお、更に少女の魅力を引き出し  
てるように見えた…

しかし、その少女が”普通ではない”事を物語る物が一つだけあつ  
た…

それは、彼女が左手の細い指で握る白鞘の”日本刀”だ。

しかし、ただの日本刀ではなさそうだ。

白木の鞘に白木の柄<sup>つか</sup>。

しかし、刀身と柄の長さが尋常では無い。

刀身はざっと四尺で太刀拵え、柄は一尺五寸のいわゆる<sup>ながつか</sup>長束の剣  
”だ。

そして、柄には真つ赤な組紐で”金と銀の小さな鈴”がくくりつけ  
られていた…

「ならば、今度は”死々舞い”でも踊るがいい」

少女は…いや、”少女に似た別の何か”と表現したくなる”それ”

は居合の構えを取ると、

「最後に言っておくが、名乗る必要はないぞ？　これから斬られるテロ屋にも…」

少女らしき者はニタリと嘲<sup>わら</sup>うと、

「これからその首を貰い受ける”人斬り”にも名などいらん」

「抜かせっ！」

女テロリストは、吼えると同時にISを展開する！

挑発なのは目に見えていたが、一刻も早く世界一安全な”筈”の甲冑へと逃げ込みたかった…

しかし…

「つまらん」

”シュツ！”

微かに空気を揺らすような最小限の動き…

少女の肢体<sup>からだ</sup>が微かにぶれたように女テロリストには見えただろう。

だが、ISの警報サインを聴く前に…

「なっ!？」

少女は、吐息のかかりそうな位置にいた…

「秘剣…」

少女は微かに呼吸を整え、

「燕返し」…!!」

”パライーン! ザシュッ!”

それは、正に刹那の刃閃だった!

そして、同時に信じられない光景でもあった…

少女の放った秘剣”燕返し”…  
確かに見事な太刀筋ではあった。

だが、だからといって”一の太刀”でISのシールドを切り裂き、  
返す刀…”二の太刀”で…

”ゴロン…ブシャアアアッ！”

ISの装甲ごと首を斬り落とすなど、可能なのだろうか…？

「フフッ」

血に濡れた刀身を半ばウツトリ見る少女は、

「こういう姿こそ、”紅椿”の名に相応しいとは思わないか？」

『その通りです。マスター』

返答したのは、刀？…いや、金銀の飾り鈴のような気がしなくもないが。

しかし、それを確かめる間もなく、

『<sup>ほろり</sup>箒、聴こえるか？』

と、通信が入る。

「ああ、”千冬”さん。ちょうど今、始末が終わった所です。予想通り、隠し持ってたISで抵抗されたので、”已む無く”斬りました。犯人の捕縛には失敗しましたが、ISコアの確保には成功です」

『”已む無く”という言葉が仕事をしてないぞ？ いつも言ってるだろう？ 余裕が有るなら、可能な限り捕縛しろと』

通信機越しの千冬の呆れるような声に、

「ISをいきなり出されて処女おとめのように震えてたんですよ。まあ、誰かさんの弟さんに力任せに奪われたせいで、処女ではありませんが」

しかし、そう言いながらも少女…”篠ノ之箒”しののほは、心中で、

（『”姉上”と同じ匂いに酔った』なんて殺し文句を言われたら、大人しくケダモノの餌になるしかありませんけどね）

『フン…まあいい。それより箒、本国…いや、正確にはIS学園へ帰投命令だ。しかも内々だが、日本政府から直々にさ』

「フツツ…日本政府も所詮は野望を捨てきれませんか？ 正直で結構ですね」

通信を切ると程なく現れた”回収班”にコアと、カッと恐怖で目を見開いた女の生首を投げ渡し、箒は闇に身体を融かすように歩き始めた…

（一夏…合うのは、あの時以来か？）

一夏、いい漢になっているか？

一夏、姉上のところにいたせいでくだらない男に成り下がってないよな？

（だとすれば、会った瞬間にお前を斬ってしまいそうだよ…）

一夏、私はお前をそんなつまらない理由で斬りたくはないんだ。

だから、一夏…

（どうか、私を愉しませてくれよ？）

EXステージ、END

\*\*\*\*\*

アンケートハガキ(?)

皆様、今まで”俺東【体験版】”をご愛読くださり、ありがとうございますm(\_\_\_\_\_)m

さて、本来ならば【正規版】に続く筈なのですが…  
大きく言えば、二つほど問題がありまして(^^;;

(1) タイトルとの矛盾

【正規版】では、原作との合流の為、【IS学園】が舞台となる為、東の出番が激減するんですよ(^| ^;) )

(2) 代わりに の筈が1st幼馴染みならぬ【2nd ダーク・ヒロイン】的な感じに…



間違いなく不動のヒロインは束なんです（^^）；

束と篤は白と黒。

対比や対極でキャラ決めてたら、いつの間にかやたらダークで濃いキャラに（；^ー^A

”サムライ・ビッチ”だの”人斬り篤”だの”首狩りポニテ”だのとやたらに物騒な二つ名が付きそうな篤が、果たして皆様に受け入れて貰えるか？という不安が…

別の理由をあげるとするなら、断言してもいいですが…更新が”すらっしゅ！”以上に遅くなります。

というのもプロット…キャラの立ち位置とかを含めたその完成率が、ヒロインごとにバラバラなんです（汗）

下手をすれば、一夏の台詞しかプロットが無かったり、中華に至っちゃ、まだキャラもあやふやだったりするんです。

逆にラウラなんかは【篤との兼ね合い】があり、ほぼVT暴走の再構成シナリオが出来てたり（登場、一番遅いの…）

シャルも…

【シャル解放 一夏、フランス大統領に…】

みたいなプロットがあります（^^）；

せっしーは、原作とあんまり立ち位置が変わらないけど、俺束の一夏と篝は、口が悪いから（苦笑）

とにかく、これが現状で決まってる【正規版】のコンセプトと問題点ですが…

読者の皆様、こんな【正規版】ですが、読みたいでしょうか？ あ  
るいは止めるべきでしょうか？

もし、ご意見をお聞かせ願えたら幸いですm（——）m

【正規版】 プロローグ： &quot;かくも世界は不浄なる場所なればこそ

皆様、こんばんわー

”俺束”の作者の暮灘です（^^；

予想以上に文章が伸び、深夜アップとなってしまいましたが…

お待たせしました！！m（――）m

皆様の暖かい声援を受け、それを支えに後押しに、【正規版】をリリースいたします（o^\_^）b

今回は、プロローグらしく千冬と箒のみの登場で、二人の過去…ある意味、”物語のもう一つの根幹”が簡単にですが語られます。

そして、かなりシリアスです。

これは、【体験版】と【正規版】が趣きの異なるストーリーだとご理解頂ければなあと（^^；

時間が時間だけに皆様に読んで戴けるか激しく不安ですが、待って  
頂いた皆様が楽しんでいただけたら幸いです（o^\_^）b

【正規版】 プロローグ： “かくも世界は不浄なる場所なればこそ

HST（極超音速旅客機）、日本政府チャーター便

日本と欧州大西洋沿岸各国をせいぜい3時間前後で結ぶ超音速旅客機：

軍需産業がISを除き全て下火となったこの時代において、既に数  
がめつきり少なくなった【少なくとも大気圏ならISより速く飛べ  
る友人機】という、このひどく豪勢な代物の乗客は、たった二人し  
かいなかった。

否、正確にはこの” たった二人を帰国させる ” 為だけに、このチャ  
ーター便は用意されていた。

「わざわざHSTをチャーターするとは…」 我らが祖国 ” の慌てぶ  
りが手に取るようですね？ ” 織斑隊長”」

少しおどけて黒髪ポニテの少女が言えば、

「そう言ってやるな、” 篠ノ之国連特務中尉 ”。それと、” 我らが  
祖国 ” という言い方は、日本とやらを名乗る国の領空に入るまで謹

んだ方が良いぞ？　噂によれば、我々は”このバッジ”を付けてる時は…」

と、自分の襟元に付いてる【UN・EISSMT】と彫り刻まれたバッジを親指で指し、

「国籍など関係無く世界人類の公僕であり、一国の為のみならず、世界平和とかいう妖しげな代物の為に滅私奉公せねばならないらしいからな」

と、半ば嘲笑うような口調の”織斑千冬”に、”篠ノ之箒”はまるでタチの悪い冗談でも聞いたような顔で、

「ISの開発国の責任とやらを外圧によって飲まされ【IS学園】を作らされた挙げ句、今度は国際貢献の建前の元に、再び外圧に負けて私と千冬さんのたった二人を人身御供<sup>ひとみくわう</sup>として国連へと差しだし…」

箒は口の端を歪め、

「今度は自国に火が付いたら、慌てて帰って来いですか…随分と頼りになる国ですことで」

笑顔と呼ぶには寧猛過ぎる表情で…

「手が滑って、思わず潰したくなる程に」

「フフツ…箒、毎度言ってるが、別にお前までEISSM…エンカ

ウンターISシャドウ・ミッション（対IS極秘作戦）に参加する  
必要は無いんだぞ？ 【IS学園】で大人しくしててもらっても、  
一向に構わんのだから？」

すると箒は、芝居ががった驚いた顔で、

「何を仰られます千冬様！ 政府の”要人保護プログラム”の名目で  
囚われの辱しめを受けていたこの箒を、モンド・グロツソ連覇と  
いう偉業を盾にとり政府と交渉の末、我が身を拾ってくださったの  
は…他の誰でもない。千冬様ではございませぬか？」

そして、姉には劣るが巨大と言って差し支えない胸を張り、

「犬さえ三日飼えば恩義を忘れぬと申します…であればこそ、この  
篠ノ之箒、例え”雌狗”<sup>めすいぬ</sup>に身をやつそうと、犬にも劣ると言われた  
くなき所存」

無茶苦茶時代がかった…というか、時代劇その物の言い回しをする  
箒に、千冬は軽く溜め息をつき、

「やめんか。むず痒い…それで、毎度ついてくる言い訳、もしくは  
本音は無いのか？」

と、千冬が切り返せば、箒はいつものシニカル・フェイスに戻り、  
「単にこのご時世、合法的に”人斬り”ができるチャンスなんて、  
滅多に有りませんから」

まるで、某銀河の妖精みたいな事（内容はひたすら物騒だが…）を  
言い出してから、

「しかも、相手がISともなれば、願ってもないです…」

と、四尺の刀身を白鞘に収めた、金銀の鈴が結ばれた堂々たる”長柄の大太刀”を愛しそうに見つめ、

「【紅椿】と【”ハンプ”】を”進化”させる、またとない餌になりますから」

”ハンプ”とは？

いや、それはまだ語るべきではないだろう。

しかし、一夏がブレイブハートとジャバウォックという”三位一体”トリニティを組んでいるのと同様、箒もまた自分なりの【トリニティ・システム】があるようだ。

もつとも、それが一夏のそれと同種同様の物だとは限らないが…

\*\*\*\*\*

この二人…



織斑千冬と篠ノ之箒という黒髪の美女と美少女に関して多くを語る必要があるだろう。

まず、二人が所属してる機関：いや、世界をステージに例えるなら、与えられた【役回り】から話すべきだろうか？

バッジに刻まれた【UN・EISSMT】：

UNは、言うまでもなく”国連”。

EISSMTは、千冬の台詞に一部が出てきたが、【エンカウンタ  
ー・IS・シャドウ・ミッション・チーム】：つまり、”対IS極  
秘作戦部隊”という意味になる。

繋がると【国連直属対IS極秘作戦部隊】：  
語義的には、

”何処の国にも属さない国際的に違法活動をする犯罪ISを、同じく何処の国にも属さない面子が狩る為に結成された部隊”

簡単に言えば、”ヤバイISを秘密裏に狩り取る、国連直属非公開の血生臭い【掃除屋】集団”だ。

別に『箒だけに掃除屋に付き物』という訳ではなく、箒が千冬と共に

にその場にいるのも、当然のように相応の物語がある。

詳しくは、いずれ語られるかもしれない…多分だが。

平たく言えば、箒の台詞そのままだ。

それは、一夏が誘拐され束と一緒に暮らすきっかけとなった第2回  
モンド・グロッソ決勝直後まで遡る…

なんの波乱もなく連覇を果たした千冬は、それを盾（あるいは餌）  
に、日本政府と交渉し、篠ノ之箒の身柄を自分に預けるように談判  
した。

動機は、単純だった。

『一夏と束が孤独から解放されようとしてるのに、箒のみが孤独の  
まま隔離される道理はあるまい？』

千冬の真意が本当はどこにあったのかは、知る術はないが、とにかく  
そのような理由で、千冬はそうに政府に迫った。

ちなみに決め手となったのは…

『私の要求が受け入れられないのであれば…そうだな。私は、日本

にあまり良からぬ感情を抱く国へ、IS<sup>ご</sup>と赴くとしようか?』

多分それは、”<sup>どっかつ</sup>恫喝”という交渉術（笑）なのだろう。

一方、箒と言えは…

”問題児”という言葉の枠組みを超えた【脅威】として政府に認識されていた。

再会した千冬にすら、

『あの時の箒は、まるで”手負いの獣”のような気配を出していたな』

と言わしめた程だ。

何しろ収容施設の誰ともともに話そうとせず、ただ【姉上より賜った大太刀】を振る日々…少なくとも、傍目からはそう見える状態だった。

そして、箒には決して看過できない”前科”があった。

そう…”大太刀”絡みで、だ。

どのような経緯かは知らないが、その日…

箒は、誰も見覚えのない一振りの大太刀を携えていた。

当然、彼女がそんな”危険物”を帯びる事を許可できない護衛兼監視役は、それを制止し、取り上げようとする。

そして、それを成そうとした瞬間…

監視役の首から上は、痛みすら感じる前に地面に落ちていた…！！

それが”虐殺”のゴングとなった。

戦闘訓練を受けた筈の者達が、為す術もなくある者は身体を左右に分割され、またある者は上半身と下半身に輪切りにされた…

監視役や護衛のみならず戦闘員／非戦闘員を問わない職員全てが、”ニンゲンだった無意味な肉塊”に変えられるまで1時間足らず…

そして、収容施設は地図から消えた…

その時、異変を察知して駆け付けた政府職員は、こう語る。

『あれ程に異常な光景、私は生涯忘れないでしょう…』

むせかえるような徹鏝臭い血の匂いと、肉の焼け焦げる匂い…

燃え盛る紅蓮の炎を背景に、全身を返り血に染めた少女は…

大太刀を片手にし、”嘲笑”していた…

「私と姉上の”絆”を踏みじろつとするからだ…当然の報いだろ？  
ククク…アハハハハハハッ！！！」

と…

政府の上級職員に気が付いた筈は、クルリと振り返り、

「安心しろ。気は済んだよ」

と、極めて冷静な声で告げ、

「じゃあ、交渉を始めようじゃないか？」

箒が出した条件は、誰もが拍子抜けする程、シンプルだった。

「姉上との絆を取り上げようとするな。それは私にとって”逆鱗”  
…そうしなければ、今まで通り大人しくもしていよう」

政府は、当然のようにその条件を飲んだ。

銃刀法にさえ目を瞑れば痛くも痒くもない条件だったし、何も考えずに要求を断るには、箒はすでに危険過ぎる存在になっていたのだ  
った…

そして、箒が連呼する【姉上】というキーワード…

もし、あの大太刀を製造したのが【セカイを狂わせた魔女】だとするなら…

何らかの方法で箒に譲渡し、それが虐殺の引金に…

いや、それどころかこの虐殺さえも”あの魔女”の差し金では？

政府がそう疑心暗鬼になったのも無理はない。  
以降、この事件…

” 敦賀山荘千人斬り ” 事件

は、政府の中では【無かった事】にされ、箒は” 東のトラップ ” として認識され、一種の ” 危険因子 ” として扱われるようになったのだった…

そのような状態だった箒を、千冬は欲した…

確かに、二人共に【魔女の関係者】であり、会わせるのは危険という考え方もあったが、結局は事無かれ主義の政府の大勢が押す…

【どうせ二人とも危険因子なのだから、まとまっていた方が管理しやすい】

という方針に落ち着いた。

そして、政府の重鎮の誰かが、

『危険因子を二つも国内に置くのは遺憾。ならば、前々から外圧を

かけられていた”国際貢献”とやらの名目で、半国外追放にしてしまえ。国内の住処<sup>すみか</sup>も、建前では”何処の国でもない”筈の【IS学園】に限定すれば一石二鳥』

と言い出した。

政府は、その魅力的な提案に反対する理由は無かった…

かくて、千冬と篤は先ずは一夏誘拐事件の情報提供の恩義を返す為にドイツへ渡り、以後国連の職員として、任務の度に世界を巡り、【IS学園】へ戻れば教師と生徒という顔で時を過ごすようになった。

かくも世界は不純にして不浄なる場所なればこそ、千冬も篤も今は機上の人になりにけり…

そして物語は、ゆっくりと始まるうとしていた…





【正規版】 プロローグ： &quot;かくも世界は不浄なる場所なればこそ

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_\_)m

事前予告が一切無しのゲリラ投下（笑）をしてしまった暮灘です（  
^^; ;

いや、実は暮灘自身がまさか日付が変わる前にアップできると思っ  
ていなかったのも、こんな形になってしまいました。

いや、勢いって怖いですね（苦笑）

さて、思い切り【体験版】と趣旨が違う描き方のプロローグでした  
が…

皆様、如何だったでしょう？

本格的に物語が始まる前に、2ndダークネス・ヒロインの第のキ  
ャラを確定しておきたかったのと、世間（特に日本）の篠ノ之姉妹  
や千冬の評価や、彼女達の立ち位置を明確化しておきたかったので、  
こんなエピソードになりました。

多分に見切り発車な部分が多く、更新も速くないかもしれませんが、  
【体験版】同様にご愛読いただければ、作者としてとても嬉しいで  
す(o^\_^o)b

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ――

【正規版】第1話    &quot;永世中立の地にて兎は崇拜され、黒き魔獣は世

皆様、おはようございまーす

何とか昼前にアップできそうでご機嫌な暮灘です（^^；

今回は、原作を基準にするなら、全く【ISらしからぬシビアナエピソード】かもしれません（汗）

シリアスじゃなくてシビアと書いたのは…

前半が白騎士事件の後…東が地球から姿を消すまでの世界の動きです。

後半は、本来は重要な機関（モンド・グロツソの主催者だし…）なのにあんまり詳しく出てこない国際IS委員会の成り立ちっぽい物が一夏視点で語られます。

言い方を変えれば、前半が世界が歪んだ経緯で、後半が歪みが恒常化した現在…のような感じでしょうか？（^^；

キーワードは、まんまズバリ”歪み”です。

原作の趣旨には合わない、【IS学園の外側に日常的に蔓延する歪んだ世界】みたいな雰囲気、少しでも皆様に伝わればなぁ～と思つてます（＾―＾；）

実は作中に、一つずつ千冬と東の過去の台詞が出てくるんですが、それぞれ別のベクトルで気に入ってたりして（＾＾；

それでは、お楽しみいただければ幸いです（o^\_^）b

【正規版】第1話      &quot;・永世中立の地にて兎は崇拜され、黒き魔獣は世

スイス、ジュネーブ  
国際IS委員会本部

”白騎士事件”の後、【新たな世界秩序の象徴】となったIS、その世界規約を策定する【国際IS委員会】の本部が、永世中立国のスイスに置かれたのは、様々な政治的な理由がある。

それは…

プライベート・テスト・ブレン

【試験飛行中だった自家用試験機のIS”白騎士”を問答無用で攻撃するような野蛮な国にISの情報を公開する事は、断固として反対する】

という趣旨の…全く正当な声明を、IS開発者の篠ノ之束”博士”と、1stパイロットである織斑千冬が、世界中のメディアに発表した事に端を発する。

勿論、それが面白くないヤンキーは、”属国”日本に外圧をかけ、それにあっさり屈した日本政府は、内務省特殊任務部隊”SST”を送り込み、施設と束と千冬の身柄の摂取と拘束を試みたのだ。

米国のスパイ衛星が捉えた束のラボをSSTが強襲したのは、そのような経緯があった。

だが、束や千冬の姿は既にそこに無く、ラボにはISに関する最低限のデータと【極秘裏にコアが入れ替えられた】白騎士のみがあった。

しかし、それがトラップだった。

この事を事前に予測していた束は、既に対策をとっていたのだ。

その対策とは…

事前にネットワークに”トロイの木馬”型のコンピュータ・ウィルスをバラ撒く事だった。

ウィルスと言っても悪質な物ではない。

単純に言えば、

【”とある受信コード”を受け取ると流れてきた動画をメッセージ付きで録画する】

という物だ。

そして、言つまでもなくコードが発信されるのは、自動対応モードの束のラボの無人警備システムがアクティブになった時で、流され

る画像は無数の隠しカメラで自動撮影される”束のラボを蹂躪するSST”だ。

比喻として適切かどうかは分からないが…

【古い方の”劇場版エヴァンゲリオン”における、”A-801発動後の戦自部隊によるネルフ内部の殺戮”】

を、もしネットワークを通じて流されたとしたら…

それを見た皆さんは、どう思うだろうか…？

そして、動画と共に配信されたメッセージには、様々な言語でこう添えられていた。

【アメリカは世界支配をより盤石にする為、ISの独占を狙っている。私のラボに侵入してきた日本の特殊部隊は、その手先】

配信された画像とメッセージはネットワークに繋がれたあらゆるコンピュータに記録され、世界中のそれを見た人々は、陰謀を”真実”として認識した。

実際、数時間後には【甘き死よ、来れ】がBGMで合成された画像が世界中のあらゆる動画サイトにアップされたのだった…



さて、ここで皆さんは少し不思議に思わないだろうか？

何故、ラボに白騎士とデータが残されていたのだろうか？

白騎士が残されていた理由は単純だ。

白騎士は、既に”覚醒していた”束の【転移魔法】で運び出すには大きすぎた。

だから、テストデータや戦闘データの詰まった”ＩＳコア”だけ抜き出したのだ。

では、なぜデータがまっさらなブランク・コアと最低限の資料が残されていたのか？

それは、千冬の提言による物だった。

『新大陸の俗物どもは強欲だ。多少は”成果”を残しておかんと、いつまでもしつこく追い掛けてくるぞ？　なんせ先住民を大虐殺した後、土地と財産を根こそぎ奪って”開拓”だとか平然と抜かす連中だからな』

しかし、ここで世界は…いや、日米は千冬や束の予想を斜め上４５°高度１５，０００ｍの判断を下した。

そう…

世界中の非難もなんのその。  
要約すれば、

『 “白騎士事件” で第7艦隊に甚大な被害を受けた我々は、IS技術を独占する事により、初めて損失を補填できるのだよっ！！ H a - H a - H a ! ! ! 』

まさに加害者が被害者顔をしていた…

『 『 『 自業自得だろうがっ！！ ボケナス！！ 』 』 』

世界中の人間が、立場や社会的立ち位置を無視して上から下まで非難したが、

【自由と正義と民主主義は、アメリカにおいてのみ生産される】

というふざけた理屈で、ISが出てくる前は世界中にトマホーク巡航ミサイルを撃ちまくった国に、何を言っても無駄である。

アメリカの強欲さと日本の不甲斐なさを正直甘く見ていた千冬と束は、この時だけは流石に打つ手は無かった。

そうしてる間に世界は、【たった1機のISとデータ】を巡り対立を深めていった…

そして、【ヤンキーがISを戦力化して、世界の覇者になる前に”第三次世界大戦”も已む無し】と各国首脳が思い始めた頃…

『仕方ないよ…悔しいけど…哀しいけど…戦争を回避するには、これしか無いんだよ…』

世界各国に【束よりの福音】…  
エヴァンジェリ・オブ・タバネ

【”戦争で奪い合わなくても済む数のコア”と米国が入手した物と同じデータ】

が贈られたのだった…

きっと皆さんは、もう答えを見つけただろう…

世界を本当に歪めたのは誰なのか？

一体、誰が…何が悪かったのか？

かくて世界は良くも悪くも、ISにより作り替えられた…

歪んだ性差別意識や価値観を生み出しながら…

\*\*\*\*\*

「ジュネーブ…いや、”国際IS委員会本部” ってのは不思議な場所だな…」

それが織斑一夏の最初の感想だった。

欧州人達は、自分達の戦争で肥え太ったアメリカが自分達から”国際機関”を奪い去り、”連合国”という枠組みをでっち上げ、【拒否権】という戦勝国の奢りそのままのルールを押し付けた事を、決して忘れていなかった。

だからこそ、” 東と千冬から拒否権を発動された” アメリカに国際  
IS委員会の設置を許しはしなかった。

そして、かつて【国際連盟】があつたジュネーブに国際IS委員会  
本部が設立可能だったのは、アメリカが脅迫じみた外交で弱者国か  
ら取り上げたISCコアより、まだ欧州連合が保有するISCコアの数  
がずっと勝っていたからだ。

ISの意味は、そこまで強くなっていた…

アメリカが出来たのは、ISの国際批准をアラスカ会議で決められ  
た事と、手下の日本に治外法権である【IS学園】を誘致、設営で  
きた事ぐらいだ。

いや、それすらも同盟という建前を持つ日本と英国の協力が無けれ  
ば叶わなかつたろう。

何しろアメリカは最初、自国に【IS学園】を設立しようとして欧  
州連合並び国際IS委員会の猛反発に合い、断念してるのだ。

当たり前だが、国際IS委員会に連合国や拒否権等という傲慢な概  
念は存在しない。

「本当に…俺はこの場所をどう解釈すりゃいいんだ…？」

一夏が困惑するのも無理は無かった。

第二次世界大戦前の【国際連合】の建物を復元し、拡大したような

”国際IS委員会本部”施設の正面…

噴水のある広場には、堂々と高さ10mは有ろうかという、

【偉大なる科学者、篠ノ之束博士】

と刻まれた銅像が聳え立っているのだから…

日本…というより、束を”世界を歪めた魔女”と名指しするアメリカの影響下にある国にいと分かりにくい、世界のある側面から見れば、束は【偉大な英雄】でもあるのだった…

例えば、【欧州連合】…

第二次世界大戦の勝者というだけで、戦後大きな顔と図体で、ジャイアンズ丸出しで世界は我が物と席卷していた、常に気に入らない”人工大陸国家”…

”アメリカの一極支配”という時代に止めを刺したという事実。

アメリカの強みは、圧倒的な経済力に裏打ちされた軍事力だ。

自らの利権の為には、大した証拠もない相手を”悪”に仕立て上げ、平然とミサイルを叩き込めるのが、アメリカの強みだった。

しかし、アメリカ絶対優位の【軍事的常識】は”白騎士事件”…

たった1機のISの前に、世界最強の筈だったヤンキー艦隊が為す術もなく全滅するという無惨な結果に終わったあの事件…

この事実だけでも、戦後アメリカに煮え湯を飲まされ続けた欧州は、溜飲を下げたに違いない。

ならば、そんな事実を生み出した束が英雄にならない訳がなかった。

あるいは、【好戦的性差別主義者】…

それらは、【ISを扱えるのは女だけ】という、何の科学的根拠もない”迷信”を、真実であり真理として狂信し、”女は男より全てに勝る”という妄執に取り付かれ、無邪気に【女尊男卑】という宗教的風潮をでっちあげた。

そんな者達にとり、束はまさに”性解放運動の救世主”であり、”女性絶対優位の象徴”…【教祖】であった。

束がその事実を知った時、どれほど傷つき、取り乱したのかも知らずに…

「なあ、ブレハ…束ねえを本当に地球から追い出したのって、実はヤンキー達の敵意じゃなくて、必要以上の好意…信奉や信仰じみた物だったんじゃないか？」

『かもしれません。マスターは、【男性差別主義者】達の事はよくご存知ですよね？』

物理的にも精神的にも右腕からの問いに一夏は頷き、

「まあね。『かつて女は男に蔑視されていたから、今度は男を虐げて当たり前、いや当然の権利』とか思ってた性別闘争やってる”性解放運動の革命家”気取りの俗物だろ？」

『そのような生き物です。そして、そのような生き物の集団の”シンボル”として、アーク・マスターは祭り上げられているのです…』

「……………」

『アーク・マスターは、その現実を知った時にツワリの如く激しく嘔吐し、三日三晩食べ物を受け付けなくなったそうです』



ブレイブハートはそこで一度言葉を切り、

『もし、お姉様とチフユが居なければ、アーク・マスターは餓死していたかもしれません』

一瞬…

ほんの一瞬だけ一夏は泣きそうな表情になり、

「束ねえ…」

と、小さく呟いた…

『マスター、この白亜の御殿…』 国際IS委員会”にも多かれ少なかれ、そのような妄執に取り付かれた者は大勢います。どうか努々忘れぬよう』

「ああ…」

『そのような者達にとり、【男性なのにISを動かせる】マスターは、”この世界に存在を許されぬ者”なのですから』

「大丈夫さ。ブレハ…」

一夏は、憤怒の炎に似た鋭い眼光を灯しながら告げる。

「”歪み”が向こうから来てくれるなら、寧ろ好都合さ。だってそうだろう？」

口元に不敵な笑いを浮かべ、

「俺は全ての歪みを破壊する為に、ここにいるんだから、な…!!」

そして一夏は、本部へと向かう。  
そう、

【”アクシズ”を正式なIS保有組織（準国家）と認める文章】  
に調印する為に。

世界はまだ…

自分達の犯した過ちの意味を…

”代償”の重さを知らなかった…



【正規版】第1話    &quot;・永世中立の地にて兎は崇拜され、黒き魔獣は世

皆様、ご愛読ありがとうございますm(\_\_\_\_)m

いや、【正規版】にすると舞台になる”歪曲地球(笑)”の再設定からなくちゃいけないから、時間がかかるかも(^^;) ;

自分で言うのもなんだけど…なんてISらしくないエピソードだろうか(汗)

ま、まあたまにはこんな風変わりなIS二次創作があってもいいのでは？って事でご容赦を( ;^|^A

次回こそは何とか【IS学園】が舞台として出せたらと思っていますが、果たしてどうなることか( ^|^|^ ;)

それでは、また次回お会いしましょう(o^\_^)(b

【正規版】第2話    &quot;黒き魔獣は、かつて兎が見た遠い日の夢をか

皆様、おはようございまーす

先に書き始めた”すらっしゅ！”より、後から書き出した俺束が先に完成してびっくりな暮灘です（^^；

今回のエピソードは…

冒頭から序盤は、サブタイトル通り内容です。

どんなに歪んでも、一夏って真っ直ぐだなっ（o^-^）b

中盤は、一夏とブレハの主従漫才…というか夫婦漫才？（^^；

マスターとデバイスの関係が考えさせられるエピソードです（笑）

ラストは…

再び登場のほーきちゃん

君こそ”狂乱のヒロイン”に相応しい…なんて書いてて思ってしまった暮灘が通りまゝす

少しでも、”俺束”第の【華やかな狂気（？）】を感じて貰えれば

なあ〜と（；^  
|^A

こんなエピソードですが、楽しんでいただければ幸いです（o^  
-  
'  
（b

【正規版】第2話    &quot;黒き魔獣は、かつて兎が見た遠い日の夢をかく

想像してみてください…

自分の発明が、願いや希望を詰めたISが…

自分の最も望まぬ報告へ世界を歪める”元凶”に仕立てあげられたんだぜ？

憎まれるなら、まだいいさ…

俺はそれでも決して納得できないけど…

篠ノ之博士は、『世界が私を憎むなら、それはしょうがないこと』だって…

今にも泣きそうな顔をしていたよ…

だがな…

現在進行形でより醜く世界を歪めてる勢力に、自分が【教祖】だの【シンボル】だのと祭り上げられる…

まともな人間に、そんな仕打ちが耐えられると思うか？

それでもさ…

隠してるつもりの辛そうな顔で…

『世界を憎んでない』って…

『人を嫌いになれない』って…

涙を溜めた瞳で微笑むんだよ…

お前ら、篠ノ之博士の…

（束の…）

何を理解しようとしたんだ…？

テメエ勝手な理屈を振りかざし…

根拠の無い理論で世界を歪め…

例えば…

束ねえがいつどこで、

どんな資料で、



『ISが女しか乗れない』なんて言った？

答えるよ…

誰か答えてみるよっ！！

感情論と笑いたければ笑え…

青臭い理想論と蔑みたければ、そうするがいいさ…

だが、言っておく…

本来、ISは老若男女を問わない…

【人がいつか宇宙<sup>そふ</sup>へ還る日】の為に…

その刻に必要なになるだろうって…

束ねえがコツコツ作ってた物だったんだ…

それを…

それを…

「貴様らはアアアアアーーーーッ！……！」

【“アクシズ”特使「織斑一夏」の国際ＩＳ委員会本部における調  
印記念演説】

より抜粋。

追記

この演説は、織斑特使の事前の強い希望により、世界中にネットワ  
ークを通じてリアルタイムに配信された。

後に何十年もの間、【とある少年の慟哭】というタイトルと共に繰  
り返しアップされ、人々の記憶に残り続ける事になる。

\*\*\*\*\*

ジュネーブの国際ＩＳ委員会本部を出て、ジャバウォックを展開。

そして空へ飛び上がると、国境など無視して一路【ＩＳ学園】へと進路を向けた。

あえて世界中の目に映るように（ジャバウォックにしては）低速で、まるで風に乗るように…空に舞う大鷲のように悠々と飛翔する一夏…

その道中…

『マスター、やらかしてしまいましたね？』

「うっ…」

『世界中にガチの”漢哭き（おとこなき）”を恥ずかしげもなく披露するとは、誠に天晴れ』

「うっっ…」

『もう今頃はマスターの泣き顔が、アチコチの動画サイトにアップロードされ、世界中の人々が閲覧してることでしょっ』

「うがぁ〜っ！　　言うな！　それ以上、俺を言葉の剃刀でいたぶるなぁ〜っ！」

『私は淡々と事実のみを語ってるだけですが？』

「そっちの方が痛いわいつ！！　なあ、ブレハさんや…もしかして怒ってらっしゃいます？」

『まさか。あのくらいやらかさないと、寧ろマスターらしくないと言いますか』

「…どういう意味かな？」

『人間は感情の動物：そして、ケダモノ・モードや下半身チートは人間離れしてますから除外しますが、一部を除けばマスターは誰よりも”人らしい”』

「…フイ！」

ブレイブハートは、軽くスリーしながら微笑むようなイメージで、

『感情抑制に成功したマスターなんて、”クソクラエ”という事です』

「なあ、ジャバ…聞いてくれ。ブレハがマスターである筈の俺をイジめるんだ…いっそ、この右腕を切り落としてしまおうか…？」

『私がいなくてジャバを”フル・スペック”で動かし、尚且つ制御しきれ自信があるのでしたら、お好きにどうぞ』

「ゴメンナサイ。モウ、イイマセン…」

『賢明な判断をしてくださったこと、感謝します』

織斑一夏…

何故か、デバイスにイジられデバイスの尻に敷かれる男であった。

「俺、本当にブレハの”マスター”なのかな…たまに主従関係って言葉の意味が、俺の寝てる間に変わったんじゃないかって不安になるぜ…」

『冗談はさておき』

「…どこからどこまでが冗談だったか、参考までに聞いていいか？」

『”言わぬが花”ですよ。マスター』

そして、ブレイブハートはどこか微笑むような調子からふと硬質な口調に切り替わり、

『マスターも自覚なさっていたようですが、マスターが壇上で行なった演説は【感情論】です。感情論だけでは、よほど偶発的要素が重なるか、あるいは何者かが周到に世論や民意を誘導しない限り、【世界規模の動き】にはなりません』

「…その通りだ」

『ですが、今はこれで十分です』

「えっ？」

『先程も申し上げましたが、人は感情の動物：マスターが感情論に徹した事により、逆に【理屈では制御できない心理】に、決して小さくない波紋を投げ掛けた事は事実』

「俺は、そんなつもりじゃ…」

『マスターはそれで良いのです。問題は世界中の”聞き手”が、どう”感じる”からです…楔くわは、既に打ち込まれました』

「????」

『マスターもまさか、演説一つで変わる程、世界が小さく軽い物だとは思っていないでしょう?』

「そりゃそうだが…」

『だから、今は眼前に広がる【普通だと思い込んでいた世界】に疑問を持つきっかけになれば十分なのです』

「そういうもんなのか…?」

『そういう物です。人の心の奥底にこびりついた疑念は、どんなに小さくとも消滅より増大を好む物です』

そして、ブレイブハートはふと気付いたように、

『マスター、そろそろミーティングは終わりにしましょう。【IS学園】が見えてきました』

「オーライ。進路そのまま、ヨーソロー。各員、投錨準備ヨーイ」

『マスター、ジャバは船じゃありません』

ブレイブハート…

スルーとツツコミを使い分ける高度なデバイスである。

\*\*\*\*\*

時節は少し遡る。

【IS学園】

篠ノ之箒私室

本来は二人部屋であるこの部屋を箒は一人で使っていた。

千冬の計らいなのだが、実際一人の方が気楽というのもあるが…

「ふふふ…」

錆どころか曇り一つ無い抜き身の四尺大太刀の刃をうっとりしながら嘲わらうルームメイトというのは、同居人にとってかなり精神衛生上よろしくない…というか下手をすればトラウマになりかねない。

「おっと…いかんいかん。今は、”紅椿”や”ハンプ”と【戦闘シミュレーション】を楽しんでいる場合では無かったな…」

帰りのHSS Tの中で【一夏の演説】の情報を聞いた箒は、今がちょうどその時間であることを思い出す。

そして、テレビのリモコンを手にとり電源を入れる。

直ぐにクリアな画像が現れ…

（一夏…）

久しぶりに見る【元幼馴染み】…今は義兄候補の男は、なるほど自分を少女から力任せに”女”にした時よりも、確かに凛々しく逞しくなってるように見えた。





「クク…クク…」

( いい…実にいいぞっ!! )

ああ、一夏…

お前は前より歪み、更に純粹になっちゃったのだな…

歪んでもなお純粹…

( 断じて否っ!! )

より深く歪んだからこそ、お前はなお純粹になった…

純粹に”姉上”の事だけを考える…

それ以外は全て切り捨てる…

例え、地球人類の命全てを質にとられたとしても、何の躊躇いもなく姉上を選ぶ…

( それぞ歪みっ!! )

ああ、一夏…

お前はそうでなくてはならぬ…

この世の大半を占める”つまらぬもの”に気をやってはならぬのだ…

でなければ、

（姉上の”純度”が落ちてしまっただけではないか…！！）

嗚呼、一夏…

お前は私を貪る時、

（姉上と同じ血の匂いに欲情し、狂ったのだろうか？）

ならば、今度はお前の肉鎗で…姉上を奥底まで味わい尽くした…  
姉上の匂いと体液がこびりつき、髓まで染み込んだ鎗で私を貫いて  
くれ…

（今度は、私が姉上の残り香を味わう番だろうか？）

その代わり、私の肢からだ体を好きに使って構わぬぞ？

お前が望むなら、いくらでも淫らに咲き誇ってみせよう。

だから一夏…

（早く来てくれ…）

あの時のように私を乱暴に刺し貫き、姉上の匂いと姉上に注ぎこ  
んでる物を、私にも恵んでくれ…！！

姉上、一夏、姉上、一夏…

どうか私の乾きを癒してくれっ！！

【正規版】第2話    &quot;黒き魔獣は、かつて兎が見た遠い日の夢をかく

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_\_)m

いっくんとほーきちゃんが、再邂逅する直前までを描いたのが今回のエピソードです(^^; ;

実は個人的には、冒頭のいっくんの叫びはかなり気に入ってたりして( ;^|^A

青臭いし暑苦しいかもしれないけど、原作ではあまり見ない、『感情を爆発させ、想いのままを言葉にする一夏』って言うのを書くことができましたし(o^\_^')b

そして、ラストの第...

お姉ちゃん好き過ぎてかなりイツちゃってます。

色々と隠しネタはありますが、一つ言えるのは...

『原作のように、素直に一夏が好き』

というヒロインではないって事でしょうか？(^|^ ;)

いよいよ次回は、再び出会う一夏と篇…

何というか…色々な意味で荒れそうな展開です（笑）

それではまた次回、お会いできる事を祈りつつ（o^\_^）b

【正規版】第3話    &quot; 黒の魔獣、IS学園に降り立ちし時、世界を動

皆様、こんばんわー

【IB】や【明久色々】に傾注してたら、俺束を1週間も放置してた…という現実に気付き、愕然とした暮灘です（^^；

いや、本当に読者の皆様、暮灘の自由過ぎる創作意欲と執筆に付き合わせてしまいすみません（――）

それでは、久しぶりの俺束更新です（o^\_^）b

今回のエピソードは、いよいよ一夏がIS学園に”入城”するくだりですね〜

割と伏線と先の流れを示唆する会話が散りばめられ、そしてラストは”あのお方”が…

ちなみに一夏は相変わらずデバイスにはイジられます（笑）

というか、ブレハさんってレイハさんから”株分け”されただけあって、真面目な口調でかなりお茶目かも（^^；

b こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^\_^）



IS学園、校庭

その日、IS学園は異常なまでの緊張に包まれていた。

当然であろう。

”彼”が禍々しい異形のISと共に、IS学園に降り立とうとしていたのだから…

曰く…

今のところ確たる証拠はないが、各国の大型軍事衛星を片っ端から破壊して、その残骸を弾幕支援射撃にして地球に正面突撃。

曰く…

地球に降り立った瞬間に実質的に世界に宣戦布告。

曰く…

2000発以上のミサイルを、誰も見たことも強力なエネルギー弾の集中豪雨のような弾幕射撃で10秒足らずで全てを叩き落とし、更に恐らくは…ハッキングによりミサイルを発射した母機/母艦/基地を自爆させた。

特に最後のそれは、【たった一度のサイバーテロで、最も多くの軍人を殺した事例】として、各国の軍事教練指南書に必ず残ってゆく内容だろう。

どれ一つをとっても、世界的な安全保障の最大級の脅威となりうるが、恐るべきはそれだけの一方的な破壊と殺戮を撒き散らしたのが、たった1人の人間とたった1騎のISという現実だ。そう、後に白騎士事件と対になり語り継がれる、

### 【黒騎士事変】

は、繰り返すが一人と一騎により引き起こされたのだ。

言い方を変えるなら、誰もが報復や逆襲を恐れて面と向かって言えないが、恐らくは”彼”は…

### 【人類史上最凶最悪のテロリスト】

として、世界史の暗黒面に名を残して行くだろう。

人の形をした災厄…

”織斑一夏”が、IS学園に降りようとしていたのだから…

『マスター』

「ブレハ、どうした？ 何か問題か？」

自らの為だけに製造した、少なくとも現在知りうる限り最強のISである愛騎”ジャバウォック”を、心理的効果も考え、見せつけるようにあえてゆっくり降りる一夏に、相棒のブレイブハートは、

『やや、演出が足りませんね』

「演出不足？ まさか、この後に及んで24基の【ブラスター・ファンネル】飛ばして、IS学園校舎の解体ショーをしろ…とか言うなよ？」

『マスターのその私ですら予測不能な発想の柔軟さと突拍子の無さには、時折、呆れを通り越して敬意すら感じます』

「…微妙にバカにされてる気がするのは、気のせいだよな？」

『気のせいだと、ブレハはブレハは断言します』

「その口調やめい。何だか【アホ毛が量産型とのデータリンク・アンテナになってる】って噂の、”ちみつこい上位固体”を思い出す」

『たまには愛らしさをアピールを』

一夏は盛大なボケかまし機能までついた、右腕と融合する寄生型”  
高性能過ぎるデバイス”に少し疲れた顔をして、

「あのなあ…んで、お前の言う演出ってのは、なんなんだ？」

『はい。ここは希代の悪党らしく「ククク…俺に食い千切られる為に用意されたメスガキ、”肉便器候補性”どもの匂いがプンプンしやがるぜ…ギャハハハハハ！」くらい言ってみたらどうですか？』

わざわざ自分の声色までイミューレートするブレイブハートに、一夏は軽い頭痛とマスターの権威が木っ葉微塵に吹き飛ぶのを感じながら…

「ブレハ…」

『はい？』

「お前は俺にどんなキャラを求めてるんだ？（汗）」

『恐らく結果は似たようなものです』

「ライっ！」

『…マスター、お忘れですか？ わざわざIS学園まで出向いた【本当の理由】を。まさか、本当に建前の”各国の最先端ISの性能調査”をやる気じゃないでしょうね？』

「…わかってるさ」

微かに苦虫を噛み潰したような顔をする一夏に、

『情はかけましょう。裏切らせない程度に。しかし、情けや遠慮は無用。必要な人材であるなら、徹底的に身も心もマスターがマスター（主人）となり”支配”するのです』

「…そうだな」

『それが【マスターの”最終目的”】を達成するのに必要ならば、躊躇する理由は有りません』

「古式豊かしい【男根主義<sup>フィロシズム</sup>】の部分的復活…ってか？」

『マスターが”最終目的”を達成する為には、時にはあるいは人材によつては、そういう手段も必要だという話です』

\*\*\*\*\*

”ソレ”は、近くで見れば見るほど異様な風体のISだった。

まず、全身漆黒に塗られた、ほぼパイロットの姿がみえないフルカ  
バード・ボディというだけで十分な威圧感があるのだが…

まず目立つのは、アンロック・ユニットの存在意義を全否定するよ  
うに両肩の付け根から伸びるフレキシブル・アームに連結された四  
枚の巨大なサーカス・バインダー！。

更に長く伸びる機械的で尖ったデザインの”尻尾”に、間違はなく  
アクティブ・テイル・スタビライザー  
近距離戦において圧倒的な力を発揮しそうなのがデザインでわか  
る凶悪な鉤爪がついたアンバランスまでに大きな左腕…

とどめは、背骨に沿うように背負った、並のISの頭頂高程もあり  
そうなバスター・ソード…

生徒の誰かが、「悪魔…」と呟き、別の誰かが「魔神…」と呟く。  
更に曰く、【邪神】に【堕天使】…

一部に、「格好いい…」とか「なんて燃える厨二的なデザインなの  
…」という肯定的な意見もあったようだ…

【人類への敵意と戦闘力という単語を練り合わせて具現化させたよ  
うなIS】に対する生徒達の反応は、概ねそんな感じだった。

少なくとも、一夏専用IS【ジャバウォック】と正面から戦いたい  
と思う生徒は、極めて少数派だろう。

そして、完全に校庭に降り立つと…

『ジャバを格納します』

「ああ」

” シュンッ ”

と、ジャバウォックは量子化して” 見えない状態 ” で一夏のガントレットに格納される。

そして現れた少年をみた生徒並びに教師の感想は…

( ( ( ( ( やっぱり、凶悪なテロリストには見えないよねえ… ) ) ) ) )

普通…というか、寧ろ真面目で精悍な印象の少年だった。

いや、TVの演説を聞いた時からその印象はあった。

あの青臭い演説…いや、主張はどう考えても” ただの悪人 ” で出来る物じゃない。

寧ろ、

【痛々しい程に純粹】

という印象を、今はまた”棘のような小さな世界への疑念”と同時に植え付けていた。

いや、それ以上に…

( )( )( なんかエッチっぽい )( )( )

という印象の方が更に強かったが(笑)

一夏の名誉の為に言っておくが、実は露出は原作男子用ISスーツより少ない。

下半身は、ブーツと一体になったピッタリとしたレザーパンツっぽい質感で、上半身は動きを妨げない為か？ かなり薄手で、実際に6パックに割れた腹筋がくつきり分かるぐらいだ。

そして、ハイネックで袖の部分が付け根から無いノースリーブというデザインだ。

とまあ、これじゃあわかりにくいだろっから…

皆さんは、アニメ【コード・ギアスR2】で、枢木スザクが”ナイト・オブ・ゼロ”になった時のKMFスーツを覚えてるだろうか？

あれからマントと手袋を取り去って、真っ黒にしたと思えばいい。

まあ、厳密に言えば加えてアチコチがシースルーになっていて薄く



淡くと中の肌色が透けて見え、それが”えっち度（笑）”に磨きを掛けているのであるが。

”ざわっ！！”

一夏を校舎から校庭の片隅から固唾を飲んで見守っていた生徒や教師からざわめきが漏れた…

遠巻きに見ていた一団の一部が左右に割れ、そこに出来た道を一人の精悍な印象の女性が、まるで”モーゼの十戒”を彷彿させるように悠然と歩いてくる…

スーツを隙無く着こなし、不思議と一夏と似た印象のその女性…

そう、彼女こそ【モンド・グロッソ】を連覇するという偉業を、波乱一つなく成し遂げた名実共に現在、世界最強の”ブリュンヒルデ”…

”織斑千冬”だっ！！

じゅっして…

” 世界的な英雄 ” である姉と…

” 世界中を敵に回した ” 弟の…

邂逅が、IS 学園で果たされようとしていた…

【正規版】第3話    &quot;黒の魔獣、IS学園に降り立ちし時、世界を動

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(\_\_\_\_)m

久しぶりの投稿に、文章が錆びれてないか心配な暮灘です(^^;

今回は、いつくん+ブレハのパートですが如何だったでしょうか？

正直、あのメール投稿不能騒ぎでテンション下がりがまくりで、特に執筆中だった…そして、執筆にかなり手間とテンションがかかる”俺束（手間）”と”すらっしゅ！（テンション）”がダメージを受け、筆が全然進まなくなっていました（汗）

ようやく、俺束が1話書ける程度にモチベーションが回復しましたので早速、執筆してみました(^^;;)

前ほど高速連日更新は難しいかもしれませんが、これからもご愛読頂ければ幸いですm(\_\_\_\_)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6747x/>

---

俺のたばねえがこんなに可愛い...に決まってるだろ？（【体験版】 + 【正規版】）

2011年11月9日21時59分発行